
Tir na nOg

妖精たちの4つの季節の物語

海土龍

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

T i r n a n o g

妖精たちの4つの季節の物語

【Nコード】

N1802L

【作者名】

海土龍

【あらすじ】

ティル・ナ・ノグ。

それは妖精たちの楽園。

そして、これは四つの季節の物語。

愛と友情と魔法、そして、それぞれの決意。

第一の季節：風

（前編）

リールは風の季節に生まれ、青い髪を持って生まれた。

その深い青を愛したウンディーネ（水の精霊）は、彼女の誕生を見守るはずであったシルフ（風の精霊）を追い払い、水の守護をリールに与えた。

故にリールは風の民として生まれながらも風の力を持たない少女になってしまった。

水に囚われた娘。

人々はリールのことをそのように呼んだ。



門が開く。

新入生たちが列を作って学園に入ってくるのを、ブロアは塔の最上階から見下ろしていた。

（あの子だ）

一目で分かるのは髪の色さだけではない。
彼女だけが異質だからだ。
不快なものを見てしまったかのように、ブロアは眉を寄せた。

「そんな顔をするものではないよ」

「ですけどね、先生」

窓から離れ、ブロアが振り返ると、アフアンは机に組んだ足を乗せて椅子に反っくり返っていた。

「哀れなリールはそれでも風の民だ」

「いっそ水の民になった方が幸せですよ」

「そうかも知れんが、髪が青い」

「その青がすべての元凶なのでしょ？」

ブローは口元を歪めて笑った。

青髪は風の民の証。

風の季節に生を受ければ、青髪で生まれてくるものだからだ。

これは両親に影響されない。

火や土、水の民の両親から風の民の子どもが生まれるなど珍しくもなく、ごく普通にあることだ。

子どもは10歳まで親元で育ち、その後は学園に入る。

学園は全寮制であり、その間はもちろん、卒業後も二度と両親と暮らすことはない。

幼くして親子の縁を切る代わりに、同じ民である家族を学園で得る。

それは教師であり、先輩であり、友人や後輩。

ブローも、もはや顔も臃げな父親よりもずっとアフアンを本当の父親のように慕っている。

――が、今回の言い付けだけは領けなかった。

「わたしの学生の中では君が一番優秀だよ」

「違いますね。優秀なのではなく、私が風の民にしては珍しく真面

目だっていうことですよ」

「そう言えば直に新学期が始まるのだけど、わたしの学生たちは最初の授業に間に合いそうかな？」

「知りませんよ。みんな好き好きにあちらこちら世界中を飛び回っていますからね。――私だってプリフェクト（監督生）でなければ今頃フィレンツェの上空でした」

「フィレンツェは良い」

「ええ。良い街です。あの街を東風と共に駆け抜けるのが毎年の楽しみでした」

「それは悪かったね。けど、君にしか頼めないのだよ」

「でしょうね」

風の民は総じて自由気ままだ。

単独行動が主で、他人に合わせることを知らない。

故に、教師という職を選んだアフアンは極めて希少な存在であり、プリフェクトなんてものを真面目にこなしているブローアも異端に近い。

「あの子がまさかわたしの担当学生になるなんて」

「面倒くさい？」

「そう。それだ。――他の先生たちはあの子を疎んで一番若輩のわたしに押し付けたのさ」

「そうして先生は私にあの子の世話を押し付けるのですね」

火の民の教師たちは手取り足取りの熱血指導をするのだと聞く。

比べて、風の民の教師たちは、基本放置である。

見よう見真似で勝手に学べ、と。

そういう態度を通す。

もっとも学生の方もサバけており、必要以上を教師に求めない。

ところが、風の守護を持たないリールに限ってはそういうわけにはいかないだろう。

彼女はブローアたちのように風に乗り、世界を駆け抜けることができないのだから。

「あと数年でイーラン先生が職を辞す。もうずいぶんな年だからね。その後釜には君を推薦するつもりだよ、ブローア」

「先生は私に一生この学園で生きろと言われるのですね」

「他にやりたい職でも？」

「花を散らす仕事なんてゴメンです」

それは少女たちの憧れの仕事である。

世界中を駆け回り、咲いた花を見つけては風で散らす。

散る瞬間の花が綺麗だと彼女たちは言うが、ブローアは彼女たちほど花に興味がなかった。

それにフローラ（花の精霊）たちの恨みを買うつもりもない。

アフアンは椅子に腰を沈めたまま上目遣いにブローアを見やった。

「虫を運ぶ仕事は？ 渡り鳥の誘導は？」

「興味ないですね」

「それならやはり教師だ。――その第一歩としてリールの世話を命じる」

ブローアは大きなため息をついた。

「数年後、私も先生のように、机に脚を乗せ、面倒な仕事はすべて学生に押し付けてやりますね」



澄んだ空の色を綺麗に染めたような髪が近付いてくるのを見つけ、アルメリアはホッと胸をなで下ろした。

すらりと長身のブローアは遠くからでもよく目に付く。

風に靡く短髪は、彼女がシルフたちに愛されていることの証。

大きすぎない瞳や薄い唇、スツと通った鼻筋は、彼女の容貌を少年っぽくしている。

アルメリアの両隣から感嘆が漏れる。

空を駆けられない者たちにとって風の民——特にこの学園においては風のプリフェクトであるブローアは、彼女たちの憧れの対象だ。

ブローアの瑠璃色の瞳がアルメリアを見出すと、しなやかな身体は真っ直ぐに歩み寄ってきた。

「アルメリア、助かった」

「私も助かったわ」

二人の視線は同時に一人の新生の方へと向けられた。

黒髪の少女たちに紛れた青髪の少女。

——リール。

「他の風の新生たちはインボルグ寮に入ったわよ。私たちもこれからサウィン寮に向かうところ。それなのにあの子ときたら……。風の方々は薄情ね。誰一人としてあの子を振り返らなかったわ。さ

っさと寮の中に入っていったわよ？」

ブロアは肩を竦めた。

「私でもそうする」

共に駆けられる者ならば側に置いてもいい。

けれど、一々振り返らなければならないような者なら捨て去る。
ブロアにも十分理解できる風の民の考えだ。

「引き取ってくれるのよね？」

アルメリアの黒曜石の瞳がブロアを不安げに見上げる。

下級生の世話役も担うプリフェクトのブロアまでもがリールを見捨てれば、いったいリールはどうなってしまうのだろうか。

同じプリフェクトとしてアルメリアは、この哀れな新入生を案じていた。

しかも、リールはウンディーネの守護を受けているのだという。
水のプリフェクトの自分が彼女の面倒を見るべきなのではないだろうか。

薄情な風の民に彼女を任せるよりもよほどその方が安心できると
いうものだ。

だが、ブロアは爽やかに微笑んだ。

「もちろん引き取りに来たんだ。その子の面倒は私が見ることになった」

「――そう。それなら私が言うべきことはないわね」

リール、とアルメリアは幼い少女を呼んだ。

青髪は足首まで伸ばされている。

だが、ブロアの短髪のようにリールの髪が風に靡くことはない。

「リール、ブロアよ。風のプリフェクト。あなたの面倒を見てくれるわ」

「よろしく、リール」

ブロアは己の腰の高さほどしかない少女に向かって膝を折り、優雅に頭を下げた。

リールの頬が赤く染まる。

側で見守っていたアルメリアも思わず顔を赤らめてしまった。

そんな彼女たちに構わずブロアは立ち上がると、右腕に軽々とリールを抱き上げ、左手に彼女が家から持参してきたキャリーケースを持った。

「じゃあ、アルメリア」

短く言い放つと、ふと視線に気が付いて目を投じる。
水の新入生たちが食い入るようにブロアを見つめていた。

物言いたげなその瞳たちにブロアは柔らかに微笑んで、その場を去った。



10歳で入学して、18歳で卒業する。
その8年間で、職とアミ（恋人）を得ることがこの学園の意義である。

最終学年であるブロアには未だにアミはいない。
職の方はどうやら教師に決まりそうであったが、それもアファンとの口約束のみで些か怪しい。

それでもブロアは焦ってはいない。

総じて風の民はたった一人のアミを見出すことを苦手とする質で、

フロアのようにアミのいない者も少なくないからだ。

インボルク寮に向かう途中、校内から中庭に出たところでフロアは燃えるような赤髪の少年を見つけて破顔した。

「ルーグ！」

フロアよりも拳二つ分ほど背が高い。

浅黒い肌に、引き締まった筋肉。

鋭い眼は周囲を威圧していたが、フロアの姿を見つけた次の瞬間には驚くほど表情を和らげた。

「フロア、お前を捜していたんだ」

「捜していた？」

訝しげに顔を顰めると、ルーグはフロアよりも更に深刻そうな表情をして口を開いた。

「お前のところのロンド。あいつがランシアとアミの契約を結んだんだ」

「知ってる。ずいぶん前のことだな」

「ところがその数日後、ロンドはアヴァロンとも契約を結んだ」

「ランシアとは解約を？」

「いや。つい昨日までランシアは信じていたのさ。ロンドは自分だ

けのアミだってな」

「二重契約は許されていない」

「そうだ。——そういった事情で、お前の許しさえあれば俺は可愛い後輩のランシアとアヴァロンのためにロンドをぶん殴りに行くところなんだが？」

「残念だな。ロンドなら今ごろグリンデルワルトを駆け回っている。捕まえたらお前の元へ連れて行けばいいのか？」

「ああ、そうしてくれ。できれば俺の怒りが持続している間に頼むな。——それにしても、スイスカ。俺には縁がなさそうな場所だな」
ぼそりと零したルーグの言葉をブロアは聞き逃さなかった。

「志望は変わらないか」

「当たり前だ。——お前は？」

ブロアは苦笑した。

つられるようにルーグも笑みを口に浮かべた。

「俺たちの代は変わり者だとよ。誰一人として王宮勤めを希望しない」

「ロクマリアも？ アルメリアも？」

プリフェクトを一年間勤め上げた学生は、将来の職として、宮使
いという選択肢を選ぶことを許されている。

そして歴代のプリフェクト経験者の多くが王宮に上がっている。

ところが風のプリフェクトであるブロアは王宮に夢が抱けず、火
のプリフェクトであるルーグは戦場を駆けることを望んでいた。

「ロクマリアは墓守になりたいんだと」

「墓守？　ロクマリアらしい」

土の民は、極端に陽気である者と極端に無愛想な者が半々いると
いうが、土のプリフェクトであるロクマリアは後者の典型だった。

無口で、いつも冷めた表情をしている。

「アルメリアは？」

「彼女はフィレンツェで雨を降らせる職に就きたいらしい」

「フィレンツェで？　――ああ、フィレンツェは良いところだから
な」

「莫迦。アルメリアはお前がフィレンツェを好きだってことを知っ
ているのさ。年に一度必ずお前がああな街を駆け抜けることも、な」

ブロアはぐっと思を詰まらせた。

アルメリアの気持ちは嬉しいが、彼女の想いに囚われたくはなかった。

「ブロア。俺のアミになることを断るのなら、せめてアルメリアのアミになってやってくれ。――あいつが可哀想だ」

「お？ やっと私を諦めた？」

闇を振り払うように、わざと明るい笑みをブロアはルーグに向けた。

まさか、とルーグ。

「7年前から想いは変わらないさ。俺のアミになれよ、ブロア。共に戦場を駆け抜けようぜ」

ルーグは人間たちの起こす戦争を眺めるのを好んだ。
故に、争いを煽り、火をまき散らす職を志望している。

「風は火を助けるから？ ——お前が私をアミにと望む理由はそれだけだからな。それに、私は争いごとが嫌いだ」

「面白いぜ？」

「不快だ」

とりつく島もないブロアにルーグは肩を竦めた。

「まあ、いい。まだ卒業までに一年ある。そのうち気が変わるさ」

「7年間変わらなかったのに？」

「変わる時は一瞬だ」

ところで、とルーグはインボルグ寮のある方角を見て言った。

「入学式が終わればすぐにインボルグ祭だ。インボルグ祭を取り仕切るのは風のプリフェクト。つまり、お前だ。――例年になくものすごい祭りを期待しているからな」

「まさか。期待されても困る。例年通り行うつもりだ。――例年通りの歌をアラウダ（歌姫）が唄い、例年通りの劇をやる」

「今年の風のアラウダは誰だ？」

「ハルだ。可哀想だが、劇では女装して貰う」

「少しはアレンジしたらどうだ？」

「面倒だ」

にべもない。

まさにブローアは風の民だ。

ルーグは苦笑した。

「確か、シルフの王女の美しさを妬んだウンディーネの女王が彼女を攫うって話だったよな？」

「そう。娘を攫われたシルフの王は、勇気あるシルフの青年に泣きつく。そうして青年は、ウンディーネの女王が化けた海の怪物に今にも食われそうになっていた王女を救い、無事連れ帰るっていう単純な話だ」

「例年通りプリフェクトがシルフの青年を演じるのか？」

ああ、とブロアは頷いた。

「シルフの王はイーラン先生が、シルフの王女は例年通りアラウダが。――つまりハルに演じて貰う」

「ウンディーネの女王も例年通り？」

「水のプリフェクトに友情出演して貰う。嫌な役だ。アルメリアには相応しくない。――インボルグ祭が終われば、次はベルティネ祭の番だ。ベルティネ祭の劇では私が友情出演することになるだろうし、次のルグナザド祭ではルーグが、サウイン祭ではロクマリアが。どれも嫌な役だけど、これもプリフェクトの仕事だからな」

嫌な役とブロアが言ったのは、この劇が前の季節を次の季節が呑み込むという意を含んだ劇だからだ。

ウンディーネは冬を司り、シルフは春を司る。

ウンディーネの王女の死は冬の終わりを意味し、シルフの青年の勝利は春の訪れを意味した。

ベルティネ祭か、とルーグがぼやいた。

「火のアラウダが決まらないんだ」

「歌の上手い子がいらない？」

「そうじゃない。みんな上手い。けど、ずば抜けてもない」

「適当に最上級生から選べばいい」

「ピンと来ないんだ。それに、誰もが納得できる者を選びたい。なぜあの子なんだ、と詰め寄られるのは勘弁だ」

「火の民はすぐに向きになるからな。自分が一番だと信じて疑わないし」

「そうなんだ。他人のことをなかなか認めないくせに、一旦認めると急に熱狂的なファンになる」

「そうして、自分勝手に神格化した像と少しでも異なってくると、攻撃的になる」

手に負えない、と二人は同時に零した。

自分たちのことを冷静に分析してみせるルーグも確かに火の民としては異端なのだろう。

今年のプリフェクトたちは変わり者ばかりというのもあながち間

違っではないない。

ふと可笑しくなって笑うと、ルーグは眉を寄せた。

「どうでも良いが、お前たち風の民は自分の身形にもう少し興味を持ったらどうだ？」

「何のことだ？」

「その子のことだ」

ルーグが指し示したのはブロアの腕の中で小さくなっていた少女だ。

ブロアは驚いてリールの姿をまじまじと見下ろした。

薄汚れたローブ。

灰色？——いや、元々は藍色だったようだ。

ブラシの通らなさそうなボサボサの髪。

足首まで長いのは、生まれて一度もハサミを入れたことがないからではないだろうか。

顔を覗き込めば頬に泥が付いている。

そう言えば、何やら臭う。

眉を顰めたブロアにルーグは呆れた。

「まず風呂に入れることだな。髪も切ってやるといい。——おそろく、そのキャリーケースに入っている服は服じゃない。ボロ切れだ」

「どういう意味だ？」

「分からないか？」

鋭く光るルークの瞳。

だが、その奥に哀しみが見えた。

親に疎まれた子。

ブロアの脳裏にその意味が浮かんた。

「最悪だ」

風の日に生まれながらシルフの守護を得られなかった。

それは、その者を疎ましく思うだけの理由となる。

シルフの守護を得られなければ風の力を使えない。

風の力を使えなければ、将来何の職にも就けない。
生きていく術がない。

それは、存在の否定を意味するからだ。

「しゃべれるか確かめた方がいい。数の数え方も知らないかも知れない。物の名前もない」

ブロアは暗闇に落ちる思いでリールを見つめた。



インボルグ寮。

キャリーケースをサロン（談話室）の扉の前に投げ置くと、ブローアはリールを抱えたまま浴場に急いだ。

入浴時間外だったが、構わない。

それを取り締まる役はブローアが担っているのだから。

湯を張った浴槽に幼い躰を投げ込む。

リールが奇声を上げた。

「風呂に入ったことがないのか？」

明らかに、暖かい水に驚いている。

湯を知らないのだ。

「大丈夫だ。落ち着け。――そう、そこに座って」

ローブを脱がせ、下着は自分で脱ぐよう言う。

既にずぶ濡れになってしまっている靴と靴下を脱がすと、シャンプーに手を伸ばした。

「でっかい犬を洗っている気分だよ」

リールの頭にシャンプーをぶち撒け、ゴシゴシと髪を洗い出した。

二時間かけてリールを洗い上げると、ブローは再び幼い躰を抱き上げて寮の廊下を駆けた。

親友ブリガの部屋の前まで来ると、自分の運の良さに感謝した。

「ブリガ！」

勢いよく扉を開くと、まさに旅行から帰ってきた彼女が窓枠から足を降ろしたところだった。

「良かった。おかえり」

「ただいま。やっぱりパリは良いわ。今度ブローアも一緒に行かない？——え？　なに、その子……？」

ブローアの腕の中を見て、あからさまに嫌そうな顔をする。
だが、それも仕方がない。

リールの出現に、それまでブリガを取り巻いていたシルフたちが一斉に去ったからだ。

風の民は身の回りからシルフがいなくなることを恐れる。
シルフがいなければ力が使えないからだ。

ブローアを愛するシルフたちも先程から遠巻きにブローアとリールの様子を哀しげな瞳で見守っている。

「その子がリール？　あの？」

「そうだ」

「ずぶ濡れじゃない」

「風呂に入れたんだ。ひどく汚れていたから。——ブリガ、髪を切る？」

「いつもあなたの髪を切っているように？」

「この子に似合うように」

ブリガは腕を組んで、長く唸った。

ルークは風の民の美意識について意見したが、風の民の皆がブローのように容姿に無頓着であるわけではない。

むしろ花を好む風の少女たちは、まるでフローラのように可憐で、おしゃれに余念がない。

ブリガもそんな少女たちの一人だ。

「できないことはないわよ。それに、ブローの頼みなら嫌だなんて言えないし」

「頼むよ」

ブローは椅子を引き寄せると、幼い身体を座らせた。

仕方ないわね、とブリガ。

腕まくりをすると、ハサミを取りに洗面所に向かった。

「シルフが側にいてくれたら、ハサミくらい持ってきて貰えるのに。――その子の側にいるウンディーネって、ずいぶんと嫉妬深いのね」

ブローは苦笑した。

それはシルフにはない感情だ。

執着心の薄いシルフたちは追い払われるままに去るし、また去る時に振り返らない。

ブリガの手がリールの髪を滑る。
その青さにブリガは改めて感嘆の声を漏らした。

「南の方の国でこんな色をした海を見たことあるわ」

切ってしまうのが勿体ないと幾度か手櫛で梳く。

だが、思い切ったかのようにハサミに指をかけた。

慣れたもので、ブリガの手際は良かった。

腕の方もなかなかで、背中に届く長さに切り揃えられている。

前髪も短く、今まで隠されていた瞳もちゃんと見える。

「はい、できた」

可愛い、可愛い、と言ってブリガはリールの頭を軽く叩いた。

「あとは服だな……」

ブローはブリガの部屋をぐるりと見回し、部屋の主と視線が合うと、気まずそうにニタリと笑みを浮かべた。

「小さい頃に着ていた服って、取って置いていたりしないかな？」

「しないわね。アルデにあげちゃったもの」

「なら、アルデに聞いて……」

「たぶんアルデの手元にもないわよ。先日、ドウヌムやテウタが着

ているのを見かけたから」

「……」

ブロアが言葉を失うと、ブリガは柔らかに微笑んだ。

「私が後輩たちに聞き回ってあげるわ。ブロア、今日のあなたは忙しいんじゃないの？——明日は入学式よ？」

「そうなんだ。実はこれからイーラン先生のところに行って明日の予定を確認しなければならないんだ」

「大変ね、プリフェクトって」

ブリガのその言葉が明日の確認に対するものではなく、リールの世話に対する言葉であることは明らかだった。



藍色の分厚いガウン。

無数に飾られた石はラピスラズリーで、胸元には大きなサファイア。

ゆったりとした帽子にはブルートルマリンが飾られており、手にした杖の上には大きなアクアマリン。

これが風のプリファクトの入学式用の衣装である。

とにかく豪華に飾り立てられてブローは式に出席した。

隣の席にはルーグ。

彼もブロー同様大いに着飾らされている。

胸元のルビーが重いのか、気が付くとそれを弄っている。

ルーグの隣にはロクマリア。

土のプリファクトの衣装は白と決まっており、土の民の髪色は銀。

胸元を飾る宝石はホワイトダイヤであり、その白づくしの装いに、ロクマリアの志望職を知らないものは神々しさを感じて目を逸らす。

だが、ロクマリアのことを幼い頃から知っているブローたちは、墓守をしたいと言った彼の言葉を思い出して、その白装束が死者を感じさせられて仕方がなかった。

そして、アルメリア。

黒いガウンが時折輝くのは、散らされた黒曜石が光を反射するから。

胸元にはブラックパール。

長く伸ばされた黒髪は、口さえ開かなければ、彼女をお淑やかに見せている。

厳かな雰囲気の中、式が進められていく。

学長トムナフリーが祝辞を述べ、4人の新入生代表が宣誓し、アラウダたちが唄う。

ルーグが火のアラウダを未だに選びかねていることから、現在アラウダは3人しかない。

大概アラウダには見目も良く、歌声の綺麗な少女が選ばれるものだが、ブロアが選んだアラウダはハルという名の13歳の少年だ。

声変わり前の澄んだ歌声。

歌い始めをわずかに聞いただけで、ブロアが彼をアラウダに指名したということは、学園中の有名な話だ。

アラウダの衣装はそれぞれの色のドレスで、ハイウエストの流れるようなドレープが綺麗なロングドレス。

ここで討論の的となったのは、ハルにドレスを着せるか否かだ。

冗談ではなく真剣に交わされる討論に、最初に嫌気が差したのはハル本人だった。

——着ればいいんだろう。着れば！

ブローが止める間もなく、そう言い捨てた彼は、サロンから飛び出して行った。

こういった事情の上、新入生たちの前に現れたアラウダたちは3人揃って可憐な姿だった。

式が終わり、プリフェクトの引率でそれぞれの寮に戻った新入生たち。

その中からリールの姿を見つけると、ブローは幼い手を引いた。

「リールの部屋はこっちだ。私と同室ってことになった。——嫌？」

リールは頭を左右に振った。

出会ってから丸一日が過ぎたが、未だにブローはこの少女の声を聞いている。

（しゃべれないのか？）

言われた言葉は理解できているようだ。

知識として知らない物はいくつかあるらしいが、まるで分からないわけでもない。

ブローはそつとリールの咽に指を触れさせてみた。

咽に異常はなさそうだ。

では、しゃべれないのではない。

しゃべらないのだ。

「君の信頼を得るのはなかなか難しそうだな」

苦笑して、ブローはリールの頭をくしゃりと撫でた。

第一の季節：風

（後編）

アフアンからの呼び出しがかかったのはそれからしばらくのことだ。

新学期の授業も始まり、休み中あちこちらを飛び回っていた風の学生たちも戻って来、死んだようになっていたインボルグ寮にも笑い声が響くようになっていた。

ブロアの部屋にも様々な国のお土産が山となって積み重ねられている。

忙しくてどこにも行けなかったのだと言うと、皆こぞって持ってきてくれたのだ。

アフアンの部屋に入ると、彼はいつものように机に足を組んで乗せ、椅子に深く寄りかかっていた。

「あの子のことなんだが……」

「リールですか？」

「文字が読めないらしい」

ぼそりと呟くように言われた言葉に、やはりか、とブロアは思った。

「空が飛べないのは仕方がないとして、他の授業にも支障が出ている。学術なら普通レベルにできると思ったのだけどね」

「親が教育しなかったらしいですよ。基本的なこともね」

湯も知らなかった、とまでは言わなかった。

「用件はリールのことだけですか？ 彼女に関しては、私が時間を見つけておいおい教えていくつもりです。幸い、最終学年の授業はほとんどないようなものですし」

「ああ。卒論だけしっかり書いてくれれば卒業させてやるさ。――話はもう一つ」

アフアンが足を机から降ろした。

彼が姿勢を正したので、ブローアは驚いて身構えた。

「お前たちは本当に誰一人として王宮に仕えるつもりはないのか？」

お前たちというのが今年のプリフェクト四人組を指した言葉だということに、ブローアはすぐに気が付いた。

先日のルীগとの会話を思い出して、頷く。

「魅力がないか？」

「ええ、私は。あとの三人はそれぞれ他にやりたいことがあるようですよ」

「ロクマリアも？」

「彼は墓守になりたいそうです」

「墓守……」

よりによって――。

だが、彼らしいと言えば、らしいので、止める気にもなれない。

「けれど、先生。先生は私を教師にするつもりだったのでは？」

「そのつもりだったのだが、イーラン先生がお前は王宮向きだろうと言われてな」

「まさか」

形式高い王宮が風の民であるブロアに向いているとは思えない。
王宮に風の民が少ないのはまさにそんな理由だ。

何をするにも形式。

お辞儀の仕方から、お茶の出し方まできっちり決まったやり方があって、従わなければ手酷い仕置きをされるのだという。

「部屋に入る時は必ず右足から、出る時は左足から……だなんて、やってられませんよ」

「だろうな。わたしでもやってられん」

「でしょう?」

同意を求めるように両手を広げて見せたブロアに、だがな、とアフアンは深い息を吐いた。

「実は王宮から命が下ったのだ。今年のプリフェクトたちを是非とも王宮に、と」

「四人ともですか？　――私は冗談じゃないですね」

「お前ならそう言うだろうと私は言っていたのだがね、イーラン先生が王宮の使者にブロアなら王宮向きだろうと答えてしまったのだ」

「あのヒゲもじゃ爺！」

髪なのか髭なのかよく分からない顔を思い出して、ブロアは悪態を付いた。

だが、ふと疑問がわく。

「なぜ王宮からそのような命が下ったのでしょうか？　今までにも？」

「ない」

「四人ともというのが更に疑問です」

ブロアが眉を寄せると、アフアンは手を招いた。
ブロアは彼に歩み寄り、顔を寄せた。

「これは噂だ。――陛下のご容態が思わしくないらしい」

王宮の主の名は、エーディン。

その光り輝くばかりの美しさをウィスプ（光の精霊）たちに称えられている女王である。

「それって、一大事なんじゃないですか？」

エーディンには後継者となるべき子がいない。

エーディン自身が先王の一人娘であるため兄弟姉妹もなく、先王もまた兄弟姉妹を持たない女王だったため、叔父や叔母といった存在もない。

「そこで王宮は、陛下の系図をずっと遡って継承者を捜すことにしたそうだ。そうして選り出された候補者が、なんとこの学園にいる……らしい」

何やら眉唾な話だ。

ブローはますます顔を顰めた。

「ここからはわたしの推測だがね。お前たちを新しい王の側近にと考えているんじゃないかな。若い王には若い臣が必要なものだ」

「――どうでもいいですけど、私はゴメンですよ。王の側近なら尚更だ。それって、とんでもなく面倒臭そうじゃないですか」

言い切ったブローに、アフアンは苦笑する。

「まったくだ。わたしでもゴメンだね」



歴代のアラウダがインボルグ祭の劇衣装として着たドレスであるため、そのデザインは些か古風だ。

ギュッとコルセットを締めると、ハルは哀れな呻き声を上げた。

「可哀想に」

胸の中だけで呟いたつもりだったが、バツチリ声になっていたら

しい。

キツとハルの涙目がブロアを睨んだ。

「そう思うのなら代わってください！　きっと俺なんかよりも先輩の方が似合います」

「まさか」

ブロアは笑って首を振る。

既に衣装を身に着けているが、ハルのように苦しいところなどどこにもない。

古代戦士のような鎧と兜は些か煩わしいが、入学式の時に着たガウンよりは数段動き易いので文句はない。

何より宝石の装飾がないところが良い。

余計な気疲れをせずに済む。

ただ、腰に下げた剣は本物らしく、ずっしりと重かった。身軽さを好む風の民としてはこの剣の重さだけは頂けない。

「はあ。早く終わらないかなあ」

「始まる前から何を言っているのよ」

ハルの着替えを手伝っていたブリガが呆れて笑う。
その隣にリール。

「劇の間、リールのこと頼むよ」

「ええ、分かったわ。――頑張ってね」



入学式から一ヶ月後にインボルグ祭が行われる。

準備期間が一ヶ月しかないと聞けば、他の民は大パニックを起こすところだが、あいにく風の民は揃いも揃って練習嫌いときている。

練習時間があればある程、無駄に余らせるだけだったりするのだ。

二日前に台本の読み合わせをして、昨日舞台での通し稽古。
そうして今日が本番である。

学生よりも更に練習嫌いなイーラン先生にかけてはまさにぶっつけ本場。

読み合わせにはもちろん、舞台稽古にさえ顔を出さなかった彼なのだ。

要領が良いのも風の民の特徴だ。
舞台設備のほとんどが例年の使い回しである。

だが、自尊心が高い者が必ず毎年いて、少しずつアレンジし、一見すると使い回しのように見えなくなっているのだから、要領が良いと言わざるを得ない。

パーティー会場の方は、これはまた奇妙なことで知られている。
皆自分が旅行してきて得てきた装飾をしたがるからだ。

こちら一角はローマ風。

あちらの一角はパリ風といった具合で、てんてバラバラ。

どの一角も斬新すぎて装飾が喧嘩しているという摩訶不思議な雰
囲気を醸し出している。

ここで水の民ならば、統一感を出そう、と言うのだろうが、風
の民に共同作業は難しい仕事なので、誰もそんなこと言い出さない。

はたまた火の民ならば、自分の装飾方法に統一することを主張し

て乱闘が開始されるところだが、平和主義の風の民なのでそういったことには陥らない。

それでこそインボルグ祭なのだ、とブロアは舞台の裾から会場を見渡し誇りに思う。

——いよいよ劇の幕が上がった。



シルフの王女の美しさを妬んだウンディーネの女王が彼女を攫い、その美しさを我が物にしようとして怪物に変身し、王女を呑み込もうとする。

そこにシルフの青年が登場。

怪物を倒し、王女を救う。

めでたし、めでたし。

——そんなごくごく単純な劇である。

だが、まともに練習をしていない役者ばかりの劇なので、単純に終わるはずがなかった。

まずシルフの王に化けたイーランが登場しただけで笑いを起こした。

化けただなんてとんでもない。

普段着だったのだ。

次にシルフの王女がセリフを忘れ、息苦しい間に堪えきれず突如として唄いだした。

明らかに出演ではないところでシルフの青年が登場したりとハプニング続きであった中、唯一まっとうに演じていたのはウンディーネの女王役のアルメリアだけだ。

さすがアルメリア、とブロアが賞賛すると、彼女は大きな溜息を

付いて言った。

「このことだったのね。去年のプリフェクトからアドバイスを頂いていたの。インボルグ祭の劇は悪夢のようだけど、自分をしっかり持って演じ抜きなさい、って」

その通りだったわ、と言い残し、アルメリアはブロアに背を向けた。

劇は半ば。

ウンディーネの女王は怪物に変身してしまったためアルメリアの出番は終了していた。

怪物は巨大な張りぼてが演じてくれる。

今にも張りぼてに食われそうになっているハルを救うために、ブロアは剣を持って舞台に飛び出した。

照明の暑さに目が眩む。

歓声。

ブロアが登場する度に少女たちの間から黄色い声が上がっていた。

だが、その時。

歓声の中にブロアの耳は悲鳴を捕らえた。

バンッ。

けたたましく大扉が開く。

ブロアがそちらに目を向けると、やがて歓声が止み、皆一様に背後を振り返った。

静まりかえった会場に、扉を押し開いた少女がふらつきながら入ってくる。

そして――。

「オーク（魔物）よ！」

空気を切り裂くような悲鳴。

祭りなどを行い、楽しく騒ぎ立てるとオークが寄ってくることもあるのだ。

ブロアは舞台から飛び降りると、学生たちを押し退け扉の方へと向かう。

会場に駆け込んできた少女は、遠目だったので定かではないが、親友だった。

そして、その親友がたった一人で会場に逃げてきたというのがどうしても解せなかった。

「ブリガ！」

床にしゃがみ込んでいる少女の肩を揺すると、ブロアは低い声を出した。

「リールはどこだ？」

ハッとして、ブリガが顔を上げた。

「劇の途中でリールが突然走り出したの。慌てて追い掛けたんだけど、中庭で見失ってしまって……。そうしたら、オークが」

「オークは中庭に？」

「分からない。私を追ってきていたから」

リールとはぐれたのは正解だったかもしれない。

リールの側にはシルフは寄りつかない。

シルフの力を借りなければ、ブリガはオークから逃げ切ることができなかっただろう。

「大丈夫。リールは私が探す」

ブリガの肩を優しく叩き、扉の外を見据えたブロアをアルメリアが呼び止めた。

「今、トムナフリー先生が王宮に連絡をしてきているわ。すぐに王宮の騎士たちが来てくれるはず」

「すぐって言ったって、数十分はかかる。——リールがいないんだ」

「あの小さいのが？」

ルーグも歩み寄ってきて眉を寄せた。
隣にロクマリアもいる。

「これから探しに行こうと思う」

「危険よ！」

「危険なのはリールだ！」

ぐっと口を閉ざすアルメリア。
その頭上にルーグのため息が落ちた。

「仕方ない。俺たちも行くぞ。喻えオークが相手でも四人いれば何とかなる。……だろ？」

「ああ。ルーグの言うとおりだ」

目を転じれば、珍しくロクマリアが笑みを浮かべている。
ブローは胸に右手を置き、感謝の礼を示した。



インボルグ寮に設置されたパーティー会場を飛び出し、学園の
庭に向かう途中。

さほど駆けることなく、ブロアたちの足は止められた。

思わず息を詰めたのはロクマリアで、小さく悲鳴を上げたのはア
ルメリアだった。

ブロアは腰に下げた重さを思い出して、鞘から剣を引き抜いた。

「貸せ。お前には重い」

「ルーグ？」

「それ本物なんだろう？ 俺なら使いこなせる」

確かにルーグなら使いこなせるだろう。

ブロアが剣を振るい、自慢の素早さを殺してしまうよりずっと良
い。

ブローアはオークから目を離さないままルークに剣を差し出した。
キラリ、と剣先が輝く。

目前にしたオークは、鱗に覆われた巨大な姿をしていた。
大きく裂けた口から突き出た牙。
顔は醜く、豚のような鼻を持っている。

「ウンディーネの女王」

ポツリと零された言葉にブローアたちは一斉にアルメリアを振り返った。

「何だって？」

「似てると思って……。似ていないかしら？ ウンディーネの女王が変身したという海の怪物に」

そう言えば、とブローアはオークに視線を戻した。

あの劇でウンディーネの女王が変身する怪物は、鯨を元にして
いる。

そして、このオークは一見すると、鯨のようだ。

だが、これは、天井ぎりぎりまで迫る巨体を目前にして議論する
ようなことではない。

「とにかくやっつけよう。俺たちの方が先にこいつに会っちゃった

んだ。王宮騎士なんか待っている時間はないぜ」

「カチャリ、と剣を構え直す。」

ロクマリアもローブの下から銀色の短銃を取り出した。

低い唸り声。

地響きは四人の腹の底まで届いた。

あまりの恐ろしさに躰を竦めたアルメリアに、ルীগが振り返る。

「オークの鱗が湿っている。あの水を凍らせられるか？」

「やってみるわ」

アルメリアの祈りで、オークの巨体が動きを止めた。

だが、それも一瞬。

オークは躰をうねらせ、その尾でアルメリアを薙ぎ払った。

「アルメリア！」

柱に頭から激突しそうになった彼女を寸前でブロアが受け止める。
ブロアの背中で柱が砕けた。

「痛っ」

「ブロア！」

「大丈夫だ。――それより見たか？ あのおーク、尾が六つもあつた」

「ええ」

鯨のような尾ではない。

長く鋭い。

剛毛に覆われたそれはまるで獰猛な獣の爪のようだった。

「焼き尽くせ、炎よ」

ルーグが炎を剣に巻き付け、オークに斬りかかる。

オークの尾がルーグを襲い、思うように剣が巨体に傷を負わずこ
とができない。

ロクマリアの短銃が鳴り響く。

彼の銃はフリントロック式の単発銃だが、威力は十分。

怯んだオークの眉間にルーグが剣を突きつけた。

地響き。

どす黒い血が流れる。

だが、すぐにルーグの炎がその血を焦がす。

苦しさにオークが大口を開けたその時、フロアは暗闇に信じられ
ないものを見つけた。

「リール！」

オークの口の奥で、幼い少女が気を失っていたのだ。

既にオークは炎に包まれている。

ロクマリアがノーム（土の精霊）に命じて、巨体から水気を奪い去っているので余計に火の勢いが良い。

「ルーグ、炎を消してくれ」

「無理だ。リールに火が移らないようコントロールするだけで精一杯だ。――それもオークが暴れてくれるものだから難しい」

ブロアはアルメリアに振り返った。

彼女は残念そうに頭を左右に振った。

「炎を消せば、オークが力を取り戻すわ」

「じゃあ、あの子を見殺しにしろというのか！」

アルメリアの瞳が揺れる。

ブロアは怒鳴ったことを悔やみ、唇を噛みしめた。

（どうすれば）

低めの声が響いた。

ロクマリアだ。

「ブロア、お前の風は物を切り裂くことができるか？ オークをあの炎ごと切り裂くんだ！」

「なるほど！」

ブロアの瞳に光が灯る。

もはや弱ったオークならば、ブロアの風でも切り裂けるだろう。炎と大地の力で、オークの鱗はボロボロだ。

ブロアは右手を掲げ、シルフに命じる。

「風よ、刃となって汝の敵を切り裂け！」

大口を開けたオークは上顎と下顎を切り離された。腹と背が別の物体となる。

バサリ、バサリ、と長い尾が幾度か動きを見せ、やがてすべてを静止した。

既に炎は突風によって吹き消されている。

ルীগは掲げられたブロアの片腕を見やり、やれやれと頭を掻いた。

「風は火を助けるものだと思っていた」

「残念ね。強すぎる風は火を殺すのよ。火が水を蒸発させるのと同じね」

アルメリアはくすくす笑い、差し出されたロクマリアの手に捕まって立ち上がった。

「ブロア、あの子は？」

「おそらく無事のはずだ。ブロアが風の刃を放つ直前に俺が土の鎧

でリールを包んだからな」

「いつの間に……」

ロクマリアの仕事ぶりにはいつも舌を巻くルーグだ。
口笛を鳴らすと、オークの屍に歩み寄った。

下ろされた魚のようになっているオークの口の中に銀色の光を見つけて、ブローアはホッと胸をなで下ろした。

ルーグが巨体を持ち上げてくれている隙に、幼い躰を引っ張り出す。

「リール。おい、リール。——分かるか？ 私だ。ブローアだ」

頬を幾度か軽く叩くと、リールがゆっくりと瞼を開いた。
四人の口からそれぞれ深く息が吐き出される。

「良かった」

ブローアは力一杯にリールの小さな躰を抱き締めた。

違和感。

空虚に襲われてブローアはすぐに躰を引き離した。

「何だ？」

アルメリアの小さな悲鳴が響いた。

「その子、守護精霊がないわ。ウンディーネがいなくなってる！」

「何だって？」

シルフたちを追い払ってでもリールの側にいることを欲したウンディーネがいなくなった？

あの嫉妬深いウンディーネが？

「もしかして、あのオークが……」

アルメリアはオークに感じた疑問を再び口にした。

「インボルグ祭の劇に登場する怪物と同じ姿のオークが、わざわざインボルグ祭を選んで襲ってくるものなの？　これって偶然なんかでは片付けられないことよ」

「何が言いたい？」

「その子は劇の途中で会場を飛び出したそうね？　そうして、オークの中から発見された。——つまり」

オークはリールに関係がある、とアルメリアは無言でブローアを見据えた。

「まさか」

「だが、考えられる。それに、アルメリアはこうも言いたいのだろう？　——その子の側にいたウンディーネがあのおークになった、

と」

——ウンディーネの女王が海の怪物に変身したように。

「オークを倒したから、その子の側にいたウンディーネが消えた。そうは考えられないか？」

淡々とした口ぶりはロクマリアの特徴だ。

論しているようでいて、人に有無を言わせないところがある。ブローアは言葉を失って俯いた。

袖が引かれる。

ハッとして見やると、リールの大きな瞳がブローアを映していた。小さく唇が動く。

「その人の言うとおりだよ」

初めて聞くリールの声だった。

「劇を見ていたら、私のウンディーネが苦しみだしたの。良くない気がした。お母さんに叩かれるんだって思った時みたいに。——だから、誰もいないところに逃げたの」

細い声だ。

弱々しく吹く風のような。

「ウンディーネが泣くの。苦しい。苦しい、って。大丈夫だよ、ずっと一緒にいるよって言ってあげるんだけど、ダメだよ、いられないよ、って。辛くて、哀しくて、胸が締め付けられそうになったの。」

そうして気が付いたら、ウンディーネはあんな姿に」

「きっとウンディーネは知っていたんだよ。自分がずっとリールの側にいることで、リールから幸せを奪ってしまうって」

「ウンディーネはあなたを愛していたわ」

ほら、と言ってアルメリアはリールに向けて両腕を広げた。すると、彼女の周りに数多くの小さな光が集まってくる。

水の民ではないブローアやルーク、ロクマリアには見えない。

だが、リールには見えているようだ。

その光すべてがウンディーネであると。

「他のウンディーネたちもあなたがとても好きだわ。あなたに憧れている。——ウンディーネはね、情の深い精霊なの。ウンディーネたちの悲恋をあなたは幾つ知っているかしら？ 愛して愛して、その愛の強さで自らを焼き焦がしてしまう。あなたのウンディーネもきっとそうだったのね。あなたのためにあなたから離れようとしたけれど、その苦しさにオークとなり、離れたくない一心にあなたを呑み込んでしまった」

「ウンディーネ……」

大きな藍色の瞳から、雫が落ちる。

アルメリアの白い指先がそれをそっと拭った。

「さあ、これからたくさんシルフがあなたの友達になってくれるわ。——大丈夫。シルフは奔放だけど、友情を何よりも大切にして

くれるから」

リールの瞳はしだいにウンディーネの姿を映さなくなっていった。だが、アルメリアの側からウンディーネが去ったわけではない。リールがウンディーネの守護を失ったのだ。

代わってブロアの側にシルフを見つける。

小さな羽を持った子どもや緑色の衣を纏った美女。

その容姿は様々だが、ウンディーネとはまるで異なった精霊たちを目にしてリールは胸が熱くなった。

青髪が風にそよぐ。

シルフの守護を受けたのだ。



風の民は総じて高い場所を好む。
故に、風の教師の部屋は塔の最上階にある。

アフアの部屋も例外ではない。
彼の呼び出しを受けたブロアは塔の上の方を見上げた。

他の民であれば階段を一段ずつ上っていくのだろう。
だが、風の民であればこう命じれば良い。

「風よ、我を運びたまえ」

ブロアの躰がアフアの部屋の窓に届くと、続いて小さな声が響いた。

「風よ、我を運びたまえ」

アフアが窓を開けて二人を迎えた。

「どうやら調子が良さそうだな」

「とんでもない。毎日喧嘩ばかりですよ。ね、リール？」

「はい。私のシルフは強情なんです。……痛っ」

リールは頬を抑え、窓の方へと視線を流した。
たった今、外へと飛び出していった一つの光。
リールのシルフだ。

——要するに、毎日喧嘩ばかりしているのは、このシルフとリールだ。

「だが、なかなかどうしてリールの呑み込みは早い。先生が良いのかな。——やっぱりわたしはスゴイ！」

「何を言っているんですか。リールを私に押し付けた張本人が」

「君はまったく良い教師になれるよ」

「お？ 王宮遣えの方は諦めましたね？」

「冗談じゃないと一刀両断したのは誰だったかな？」

「私ですが、何か？」

アフアンとブロアはお互いに顔を見合わせて笑い出した。

「ああ。これでわたしの悩みはたった一つだ」

「何ですか？ もう一人世話を見てくれて言っただって、私は知りませんよ？」

いつもの席に着き、いつものように机の上に組んだ足を乗せる。だが、顔は真剣そのものだ。

「そんなことではない。もっと深刻な悩みだよ」

ブロアは眉を寄せた。

（いったい何だというのだろうか？）

不意にアフアンが吹き出した。

堪えきれないとばかりに笑い出す。

「お前のアミのことだ。まだ決まらないのか。——こうなったらいつそリーグあたりで手を打たないか？　リーグならお前を女にしてくれるぞ？」

ブロアは肩を竦めた。

そうして、言い捨てる。

「冗談じゃないですね」

【第一の季節　おわり】

第二の季節：火

（前編）

昔むかし。

アラウダという名の少女がいた。

世界中に戦争の絶えない時代。

少女の国も隣国との長い戦争を行っていた。

死に逝く人々のために少女は敵も味方もなく唄った。

少女のレクイエム（鎮魂歌）を耳にした敵国の王は、その美しさに心をほだされ、少女が49の曲を誤ることなく歌い上げたのなら、兵を引くことを約束した。

少女は唄い、王は二度と少女の国を攻めることがなかった。



要するに。

そう言い吐き、オルウェンはルーグに向かって人差し指を突き立てた。

ルーグは身構えた。

彼女の言わんとすることは言われなくともよく分かっている。

「さっさとアラウダ（歌姫）を選べということですよ？」

「そういうことだ。直にベルティネ祭なのだぞ。アラウダ不在の祭りなど、みっともない」

「分かっています。……けど」

ルーグが俯き押し黙ると、オルウェンのストロベリーブロンドがふわりと揺れた。

その下から除く瞳はルビーで、健康そうな肌は小麦色。

彼女の美貌は際立っていたが、それ以上に目を引くものは、スィカでも隠し持っているのかと思うほどの巨乳である。

彼女と初めて会して、顔や腰までスリットの入った服から覗ける足よりもまず胸元に目を向ける者の方が多かった。

ところが、である。

この彼女の教え子是不幸なことにその辺りのことが疎い。
図体ばかりがニヨキニヨキと大きくなり、精神面はサッパリ。
子どもも良いどころ、ガキである。

アラウダを選べないでいることにもこちら辺に原因があるのではないかと、オルウエンは睨んでいる。

「アミ（恋人）の方はどうだ？ 決めたのか？」

「それがまだなんです。ブロアがなかなか良い返事をくれないもので」

「いい加減、ブロアは諦めたらどうだ？」

ブロア。

風の民であり、今年の風のプリフェクト（監督生）である少女だ。

ルーグは学園に入学してきた当初からブロア以外のアミは考えられないと公言し続けている。

ところが、ブロアにそんな気はさらさら無い。
当然だ。

ルーグが幼稚すぎるからだ。

プリフェクトは教師たちの推薦の上、学生たちの承認を得てその

任に付く。

火の民としての力量、知識、カリスマ性においてルーグは抜群であったため、彼がプリフェクトになることに対して異論を唱える者はなかった。

そんな彼の欠点と言えば、たった一人を選べないことだ。

18歳にもなってアミを見つけれない火の民は極めて珍しい。一度か二度の失敗を乗り越えて最終的に決定したアミがいても良い年齢であるはずなのに、この教え子ときたら、未だに一人もアミの契約をしたことがないときた。

「時には切り捨てることも必要だ。切り捨てることが常に非情であるとは限らない。切り捨てないことの方が非情である時がある。また、非情になれないのは、他人に非情だと思われたくないからだ。思われることを甘んじて受け入れなければならない時もある」

オルウエンは大きく頭を左右に振った。

「――分からないか」

分かりませんと首を横に振るのは容易だ。

また、分かりましたと頷くのも易い。

だが、そのどちらの答えもオルウエンは望んでいなかった。

「ほら。これを貸してやるから、さっさとアラウダを決めて来い」

「……はい」

頷いてからルーグは手渡された雑誌に目を落とした。
ギョツとする。

オルウエンに匹敵する巨乳の美女たちがその表紙を飾っていた。

「なんですか、これ？」

「お前専用の教科書だ。わざわざ取り寄せてやったんだぞ」

感謝しろと言って、オルウエンは片手を振った。

部屋から出て行けという合図だ。

仕方が無くルーグは雑誌を手にオルウエンの部屋を後にした。



ベルティネ寮。

歌声は重なるほど美しく聞こえるものだと言うが、現在寮内に響く歌声にルーグは目眩を覚えた。

重なり具合が絶妙に気持ち悪いのだ。

皆で同じ歌を同時に唄ってこそ美しいものなのだが、バラバラの歌をバラバラに唄うものだから、聞けたものではなくなっている。

「酔いそうだ」

ルーグは廊下の真ん中でしゃがみ込んだ。

歌声はルーグを求めて、大きな波のように押し寄せて来る。頭痛がする。

耳を塞いでも割れるような音は変わらない。

（耐えられん）

ルーグは立ち上がり、寮から逃げ出した。

――だが、向かった先も寮だ。

ただし、ルグナザド寮。

土の学生寮である。

ルーグはサロンの前を突っ切って、中庭に出た。剥き出しの大地に、唐突に生えた大樹。

その幹に背を預け、根を椅子にしている少年を見付け、ルーグは思わず笑みを浮かべた。

軽く瞼を閉ざしているが、彼が夢の住人ではないことはよく分かっている。

案の定、ルーグの影が彼の顔を覆うと、鉛色の瞳は開かれた。

「――どうした？」

「ここは静かでいい」

「座ったらどうだ？」

頷いて、ルーグはロクマリア同様大樹の根元に腰を降ろした。

後頭部を幹に押し当てると、すうっとそこから何かが抜けていくような心地になり、胸が静かになる。

（不思議だ）

幼い頃からそうだった。

ロクマリアの側にいると、ルーグのサラマンダーたちが大人しくなる。

彼を真似て瞼を閉ざす。

しーん、という音が聞こえてくるようだ。

「おい、眠ったのか？」

「いや、起きている」

ふとロクマリアの手に視線が向く。
白い手袋。

最近よく着けているのを目にする。

「手、どうかしたのか？」

細く長い彼の指が好きだった。

触れられると、ひんやりと冷たい。

常に体温が高い火の民とは明らかに異なる。

手袋を残念に思いながらルーグが言うと、ロクマリアは目を伏せた。

「――怪我をした」

「手に？ 見せてしろよ」

「火傷だ。触るな。お前に触れられると、痛む」

「……悪い」

ルーグは短く謝り、身を引いた。

「アルメリアに治して貰え」

「だいたい治っている」

「けど、痛むんだろ？」

「……」

頑固な彼はおそらくアルメリアには頼まないだろう。
ルーグはやれやれと頭を左右に振った。

「両手か？」

「右手だ。右の手の甲」

「目立つのか？」

「跡が残りそうだ」

「それはひどいな」

色の白い綺麗な手だったのに、もったいない。

再び、どうしたんだ、とロクマリアは問う。
ルーグは項垂れた。

「お前はどうかやってアラウダを選んだんだ？」

「どう？——どうってことはないな。この娘だと思った」

「それだけ？」

「ブローほどの即決をしたわけではないが、お前ほど悩まなかったな」

「……ブローが羨ましい」

「数人の歌声しか聞かなかったそうだな。ハルの歌声もほんのわずかしかなかったに決めたらしい。あれはあれで失礼だ。――アルメリアは友人をアラウダに選んだ。誉められたことではないが、文句なしに綺麗な歌声だったため、批判はされなかった」

「やっぱりダチだからって選ぶと、批判されるものなのか？」

「そうだな。それでも仕方がないな」

ロクマリアの淡々とした口調は皆に好かれている。
それはルーグも例外ではない。

アルメリアは彼の声を水の滴る音に喩えたが、ルーグは薪がはぜる音に喩えられる。

また、ブローは木々を揺らすそよ風だと言った。

つまり、ロクマリアの声はその者にとって心地よいとする音に聞こえるようだ。

「誰もが納得する答えを捜すのは難しい。何かを選べば、何かを選べない。お前の手は二つしかない。お前がその手に掴めるものはわずかだ。――だからお前は選ばなければならない。何かを選ばない

ために」

ルーグは言葉を返さなかった。
押し黙って、瞳を閉ざした。



どのくらいそうしていただろう。
サラマンダーのざわめきでルーグは目を覚ました。

さっと上体を起こすと、ロクマリアの呆れたような瞳と目が合う。

「ずいぶん眠っていたな」

「歌声が……」

「ああ、メンヒルがハルとマグエヴァと一緒に唄っている」

「メンヒルとハルとマグエヴァだけ？　——もう一人いるだろう？」

メンヒルは土の、ハルは風の、マグエヴァは水のアラウダだ。

薪のはせる音。

炎が弾け飛ぶ。

喜び散って、沈むように灰になる。

ロクマリアも耳を澄ませ、分かったとばかりに頷いた。

「あの歌は四つの旋律が重なって初めて曲となる歌だ。お前がなかなか火のアラウダを選ばないものだから、他のアラウダたちは勝手に選んだ火の娘と一緒に唄っているのだろう」

「……すごい」

「そうだな。綺麗な歌声だ」

（いったい誰だろうか）

気が付くとルーグは駆けだしていた。

呼び止めるような、呆れたような声が追ってきたが、構わなかった。

火がついてしまった導火線のように、ルーグはルグナザド寮内を駆けた。

けたたましく扉を押し開いた後、すぐにそのことを後悔した。

驚いて振り返った四人。

一人は湖のような青髪の少年。

一人は銀髪の儂い印象の少女。

漆黒の髪を持った少女は凜としてルীগを見つめ返し、最後の一人は三人の影に隠れるようにして立っていた。

髪色はワインレッド。

驚いた瞳はガーネット。

どくん、とルীগの胸が鳴った。

（この子が今の歌声を）

初めて見る顔だった。

いや、どこかで会っているのは間違いない。

学生数はさほど多くはないし、同じ火の民であるのなら家族同然だ。

何度か擦れ違っていたはずだ。

学園の廊下でも、寮のサロンでも。

それなのにどうして今まで自分はこの少女に気が付かなかったのだろう。

「ルীগ先輩、歌の練習の邪魔です。出て行って下さい」

言ったのは、ハルだ。

ブロアが選んだアラウダは13歳の少年だが、こうして少女たちに紛れていても何の違和感もない。

可哀想なことだが、声変わり前である上、背が低く、女装もこなせるとあってはそれも仕方がない。

ルーグはハルの言葉を無視して、赤髪の少女に歩み寄った。

「名前は？」

ルーグの胸ほどにしかない小さな少女は、目を大きく見開いて彼を見上げた。

「……ブリジット」

ルーグは赤い瞳を細めた。

膝を折り、少女の手を取る。

そうして、その甲に唇を当てた。

「ブリジット。今この瞬間からお前は俺のアラウダだ」



面白いことになっている、とブロアが事の次第を聞いたのは、アファンの口からだった。

この頃のブロアはルীগから逃げ回る日々を送っている。
見つければ、ベルティネ寮に連行され、劇の練習をさせられるからだ。

直にベルティネ祭だが、ブロアにとってはまだ先のことである。
今から練習をしてどうするのだ、と言いたい。

ところが、祭り好きな火の民ときたら、一ヶ月前から祭り気分なので付き合いきれない。
ベルティネ寮はすっかり祭りに備えた装飾でいっぱいになっている。
る。

（なんであんなに気持ちが持続できるんだ？）

風の民ならとくに気持ちが萎えている。

飽きっぽい自分たちはすぐに次の目新しいものに駆けだしていつてしまう。

練習や準備までも楽しんでしまう火の民とは根底から異なる。

気配がして、ブロアは振り返った。

ホッと息を付く。

ついに彼に見つかってしまったのかと思ったが、シルフたちに導かれて屋根の上を移動してくるのはブリガだった。

「搜したわ」

「だろうね」

「ここずっとみんながあなたを搜しているわ」

「逃げ回っているんだ」

「そのようね。——ルーグのこと、聞いた？」

「ついにアラウダを選んだんだって？　アフアン先生から聞いた」

「先生から聞くなんて、ずいぶんと情報が遅いわね。じゃあ、これはどう？　ルーグはね、断られたのよ」

「まさか」

振り返ると、ブリガは両肩を竦めた。

「そのまさかよ。――ブリジットって知っている？ 5年生の女の子よ」

「ああ、ハルから聞いたことがあるな。綺麗な声をした子だって。いつかアラウダに選ばれるに違いないって、ハルが言っていた」

火の民にしては珍しく物静かな子で、歌を唄っている時以外は存在感が薄いのだともハルは言っていた。

――だが、それは逆に、歌さえ唄わせればその存在感を増し、誰もが目を引く少女だということだ。

「なんでブリジットはアラウダを断ったんだ？」

皆の憧れであるプリフェクト。

火の民にとってルーグは自分たちの象徴である。

そんな彼から望まれれば断れる者はいないだろうと思われた。

ブリガは表情を引き締め、声を低めた。

「ブリジットはね、お祭りを盛り上げる職に就きたいんですって。

――お祭りの多くは豊作を祝うものや平和を願うもの。あの子は争いごとが嫌いなもの。ところが、ルーグは……。ルーグの戦争好きを知らない人はいないわ」

戦争を望むルーグのアラウダにはなれない。

ブリジットの気持ちは痛いほどブローアには理解できた。

「そうか」

——仕方がない。ルーグが諦めるしかないだろう。

だが、できれば諦めないで欲しいともブロアは思っている。

ルーグが戦争を欲さなければブリジットは彼のアラウダになることを承諾するのだ。

「ルーグは餓鬼だ」

ブロアは吐き捨てた。

「あいつは戦争と花火の違いが分からないんだ。戦争は花火ほど華やかなものではないし、格好いいものでもない。——あいつにも私たちのように世界中を駆け回れる力があつたのなら良かったのに」

偶然通りがかった国で戦場を目にして、ブロアはルーグの幼さに気が付いた。

積み重ねられた死体の山。

見てしまった瞬間、墓守という職を希望しているロクマリアを思い出して、彼の元へ一目散に駆け出した。

そうして、彼を前にして、声を殺し涙した。

ブロアの突然の訪問に驚いただろうに、彼は何も言わずにブロアの涙を指先で拭ってくれた。

あれは数年前。

何をしてても華やかで目立つルーグよりも、物静かで無愛想なロクマリアの胸の方が大きいと感じた出来事だった。

ブロアは屋根の上に仰向けに転がった。

青く澄んだ空。

柔らかそうな白い雲がふわりふわりと浮かんでいる。

「あいつ、本当は優しいヤツなのにな」

たった一人を選べないくらいにルーグは優しい。

選ばれなかった者の気持ちを気遣ってしまう彼に、戦場なんて似合わない。

戦場には非条理に命を奪われた者たちで溢れている。

ブロアは青髪を風に遊ばせ、呟いた。

「――そろそろ劇の練習に出ないとマズイかなあ」

独り言のつもりだったのだが、そうね、とブリガの答えが返ってきて、苦笑した。



大混乱。

——という言葉がまさに当てはまる状況だった。

うんざりする。

ルীগはブローのように姿を隠したい気持ちで、パーティー会場を見回した。

ベルティネ祭の準備の進む寮内。

喧嘩の原因は装飾方法の対立だ。

ダイアンは窓枠に薔薇の花を飾るべきだと言い、クラナドは芙蓉を飾ろうと言い、サモンは何も飾らないと言い張る。

三人それぞれが支持者を従えて、まさに一触即発というところにルীগは呼びつけられた。

喧嘩の仲裁もプリフェクトの役目だ。

言い分を人通り聞いてやることにして、まずダイアンの方へと向

き直った。

——が、その一瞬。

クラナドがサモンに殴りかかり、場は騒然となった。

「やめろ、お前ら！」

殴られた仕返しにと、クラナドを殴り返すサモン。

それを見たクラナドの取り巻きたちがサモンの取り巻きたちに殴りかかり、放って置かれて堪えるものとダイアンたち一派も誰構わず殴りかかる。

悲鳴を上げる少女たち。

野次馬たちが殺到して、喧嘩を煽り出す。

まるっきり無関係な者たちまでも殴り合いに関わり、ひどい有様だ。

「いい加減にしろ！」

ルーグが片手を振り上げ、巨大なサラマンダーを召喚しようとした時だった。

ザバァー、と雨。

——屋内なのに？

振り返ると、冷ややかな表情をしたアルメリアがそこに立っていた。

一人漏らさず濡れになった火の学生たちは情けない顔で水のプリフェクトを見やり、それから自分たちのプリフェクトに助けを求めて振り返った。

「アルメリア、その……。どうしてここに？」

「あなたに会いに来たのよ、ルーグ。――ものすごい騒ぎね。さすが火の民だわ」

氷のような口ぶりにゾツとする。

サラマンダーが水を何よりも嫌がることを承知で大量の水をぶっかけてくれたのだ。

恐怖の大王が降臨した、と火の学生たちから囁かれてもルーグにはどうすることもできないと思う。

アルメリアはずっと目を細めて彼らを一瞥すると、ルーグを見上げた。

「ちょっと来てくれる？ 話があるの」

逆らえるわけがない。

ルーグはアルメリアの背を追って会場を出た。

「ブリジットのことなんだけど。――あなた、知ってる？ あの子ひどい嫌がらせを受けているわよ」

「なんだって？」

ルーグは驚きのあまり歩みを止めた。

構わずアルメリアは足を進め、どうやらサロンの方へと向かって
いるらしかった。

「当然でしょう？ アラウダになりたがっている女の子たちは大勢
いるわ。それもルーグ、あなたに選ばれたがっている女の子がね」

常に人気の多いサロンもベルティネ祭間近になると、ガランとし
ている。

アルメリアはバルコニーに出ると、手摺りに身を乗り出し、爪先
立ちになった。

「ここからでは見えにくいわね。――ほら、あそこ。あのあたりの
屋根の上にブロアが寝そべっているわよ」

サウイン寮からだと言えなの、と言いながらアルメリアは指差
した。

ルーグも隣に並んでブロアの青髪を捜したが、見つけれなかつ
た。

アルメリアは諦めたようにため息を着き、手摺りに背を預ける。

「ルーグは喧嘩を止めようとするくせに、戦争が好きなのね？ 争
いごとが好きなくせに、ブリジットが嫌がらせを受けていると聞け
ば、心を痛めるのね？」

アルメリアの黒曜石の瞳が揺らぎ、その奥に映るルーグの表情も
どこか切なげに揺らいだ。

「あなたとブロアが背中を預けるようにして立っている姿を見るのが、私は好きよ。でもね、ルーグ、お願いよ。ブロアを戦場に連れて行かないで。そして、できれば、あなたも戦場には行かないで。――それが火の民の気質なのだと言われてしまえば、水の民である私には何も言い返せないけれど。でも、私は、あなたにはブリジットの歌に耳を傾ける資格があると思うの」

アルメリアはそっとルーグから視線を外した。

見下ろす大地はさほど遠いわけではなかったが、どうしたわけか、足下がひどく心許ない。

「ブリジットはあなたが初めて選んだ、たった一人、でしょう？
諦めてはダメよ」



ベルティネ祭前日。

オルウエンの呼び出しを受けて、ルーグは彼女の部屋に訪れた。

マゼンタ色のドレスを着た彼女の美貌は相変わらず際立っていたが、それによってルーグの顔色が変化することのないのも相変わらずだった。

つまらなそうにオルウエンは肩を竦めた。

「あれは目を通したのか？」

「あのエロ雑誌のことですか？ 見ましたよ、一応」

「で？ ちゃんと出来たのか？」

「何がですか？」

すっとぼけたのではなく、真顔で答えたルーグにオルウエンは心から嘆息した。

「お前がブリジットを押し倒したら教えろ。即卒業させてやる。卒業の提出も不要だぞ」

「何を言っているんですか」

こちらにも心底呆れて、頭を左右に振る。

「準備が忙しいので、会場に戻ってもいいですか？」

「まあ待て。――風のブローはちゃんと劇の練習には参加しているか？」

「ようやく昨日から来だしましたよ。今日は徹夜で猛練習です」

「ブリジットはどうしている？ アラウダを承諾しそうか？」

答えようとして、ルーグは息を詰まらせた。

ルーグの方こそ知りたい。

ブリジットはどうしているのだろうか？

どうしたらアラウダを引き受けてくれる？

彼女以外のアラウダなど、もはや考えられなかった。

「ここ数日の間、何度か見かけました」

他の少女たちに囲まれ、嫌味を言われているところを何度かルーグがさり気なく救ってやっている。

ルーグがきっぱりと彼女を諦めるか、ブリジットがアラウダを引き受けてくれれば、彼女がそういった目に遭うようなことはなくなるのだが、相変わらず二人の状態は中途半端なままだ。

そのため、少女たちの嫉妬をブリジットが一身に負うことになる。

「次は『女性の口説き方』という本を貸してやろう。お前は小さい頃、英雄物語ばかり好んで読んでいた。きっとそれがすべての原因なんだろうな。——くそっ。こんな風に育つと分かっていたら、ぶっ叩いてでも本を取り上げたんだが」

オルウエンはさも悔しそうに地団駄を踏んだ。

爆音。

二人は顔を見合わせ、即座にバルコニーに飛び出した。小さな音だったが、サラマンダーたちが騒いでいる。あつてはならない火気に、ルーグはその元を捜した。

「あいつら、また……」

中庭に少女たちの塊。

その中心はブリジットだ。

ルーグは手摺りに足を掛け、一息に下へと飛び降りた。

幸い、オルウエンの部屋は二階だ。

苦もなく着地してみせると、少女たちに向けて低い声を出した。

「ブリジットに何をした？」

「ルーグ先輩!？」

突然の火のプリフェクトの登場に少女たちは一様に驚きの表情を浮かべた。

だが、それだけではない。

彼は今にも燃え上がらんばかりの怒気を放っている。

彼にしては珍しいことだ。

火の民にしては穏やかで、どこか冷めたところのあるルーグはめつたに怒りを露わにしない。

だが、今の彼は明らかに怒っている。

「ルーグ先輩、私たちはその……」

少女たちの膝が笑っている。

ぺたん、と一人が尻餅を着いた。

ルーグはブリジットの袖が裂けているのを見つけて、冷ややかで鋭い眼を彼女たちに向けた。

ざわり、とルーグの赤髪が揺らぐ。

彼のサラマンダーが熱い吐息を漏らした。

「行け。さっさと逃げるんだ。燃やされたいのか？」

堪えきれない怒りにルーグの瞳が鮮やかな光を見せる。

だが、彼女たちを炭にするわけにはいかない。

にげろ、と怒鳴って少女たちを追ひ払った。

悲鳴を上げながら、あたあたと逃げていく背中にルーグ自身も吐

息を漏らした。

（胸が苦しい）

こんなにも誰を想い苦しくなるのは初めてだ。

「ブリジット」

彼女の名前を呼んで、ルーグはその場にしゃがみ込んだ。

無理に押さえ込んだ炎が軀の奥で暴れている。
吐き出したくて、吐き出したくて、堪らない。

「ルーグ先輩？」

心配げなブリジットの顔が覗き込んできて、ルーグは無理矢理に
笑みを浮かべた。

「髪が焦げているな。ここだ」

ブリジットの左耳に触れる。

熱い。

先程の爆発はブリジットの髪を燃やしたのだと知って、胸が焼けるように締め付けられた。

頬に触れ、肩に触れ、背中へと腕を移動させると、ぐいっと彼女の軀を引き寄せた。

「もう二度とこんな思いをさせたくない。俺の側にいるんだ、ブリ

ジット。お前を守らせてくれ」

腕の中で小さな躰が震えるのが分かった。
そうして、彼女は首を横に振る。

「命を奪うことを欲する方に守って頂きたくございません」

ブリジットは両手をルীগの胸に着き、肘を突っぱねた。
躰を離し、ルীগを睨み付ける。

「私は、戦争を望むあなたが嫌いです」



舞台裏に紺色の衣装を着たブロアが優雅に紅茶を飲んで寛いでいる。

緊張とは無縁の風の民。

緊張するほど力を入れて練習してきたわけではない、という説もある。

彼女たちからしてみれば、劇なんかの練習に命がけで取り組む火の民は正気の沙汰ではない、という言い分もある。

どちらにせよ、このことに関しては数百年かけたって相容れないだろう。

サラマンダーの王子の衣装を身に着けたルーグが舞台裏にやってくると、アルティオの残念そうな顔と目があった。

「どうかしたのか？」

「ルーグは何も思わないの？　せっかく作ったアラウダの衣装が無駄になってしまったのよ」

結局、ルーグはベルティネ祭当日になってもブリジットを説得できず、まだ他の少女をアラウダに選ぶこともできなかった。

「それからもう一つ。ブロアもちゃんとした格好をしたら相当な美人だと思うんだけど、普段もあだし、劇でも男装なのよね。残念だと思わない？　――ねえ、ルーグ。見たくない？　ブロアのドレ

ス姿」

ブローアとは学園に入学して以来の長い付き合いだが、言われてみれば一度も彼女のドレス姿を見た記憶がない。

だが、アルティオの言うようにそれを残念だとは思わなかった。

「ブローアは何を着ていてもブローアだろ？」

「もちろんよ。けど、見たいじゃないの。綺麗に着飾ったブローアが」

プリフェクトであるブローアは行事の度に着飾っている。

だが、それはアルティオにしてみれば数の内に入らないのだという。

「ドレスじゃなくちゃ！ ブローアのドレス姿が見たいの」

言って、アルティオは反応の悪いルークに小首を傾げた。

「意外だわ。ルークはブローアにアミの契約を迫っているくらいだから、絶対賛同してくれるって思ったのに」

「俺は別にブローアにドレス姿を求めてないからな」

「女らしさは必要ないってこと？」

「そうだな。ブローアにはずっと一緒にいて、同じものを見つめていて欲しいんだ」

——共に笑い、共に哀しみ、同じもので心を動かし、同じ時を共有したい。

幼い頃からそうしてきたように、これからずっと。

「そんなの違うわ！」

不意に、アルティオが声を荒げた。

「ルーグはブロアに対して、抱き締めたいとか、キスしたいとか、思ったことないの？ 胸がキュンと苦しくなったり、切なくなったりしたことはないの？」

「当たり前だ。ブロアはダチだ」

即座に言い返して、ルーグはハツとする。
驚いた表情の彼に、アルティオも驚く。

「ルーグ。あなたって、ずいぶんと子どもだったのね」

アラウダの衣装が誰にも着られることなく、壁の装飾になっている理由をアルティオは知った。

アラウダの歌を理解できない子どもに、アラウダを選ぶことは不可能だ。

アルティオは顔を引き締めて、ルーグに向き直った。

両手にぎゅっと劇の台本を握り締める。

「アラウダはね。命をかけて歌を唄って、平和を勝ち取った少女なのよ。愛する人々と愛する祖国を歌で救ったの。――そのことをよく考えながら、今日の劇を演じることね」

劇は例年同じ内容である。

だが、今年はアルティスによって台本の手直しをされ、特に火のアラウダが不在のため、彼女の出番がなくてもストーリーが通じるように直された。

アルティスは自分の台本に自信を持っていた。
だからこそ言えた言葉だった。

第二の季節…火

（後編）

サラマンダーの若き王は戦争に明け暮れていた。

己の国の領土を広げようと、隣国に攻め入り、征服し、更に隣国へと攻め入っていった。

幾つかの国を我がものとした王はついに最果ての国へとたどり着く。

この国さえ攻め落とせばと戦いを挑むが、城壁は堅固で味方を失うばかりである。

王の友人であるシルフの王子が言った。

「我が友よ、君は君の背後を振り返ったことがあるだろうか？
——さあ、見るんだ。君の兵の疲れ切った表情を」

王に命じられるまま他国を攻め続けていた兵たちはいつの間にか祖国から遠く離れた地まで連れてこられていた。

——帰りたい。同じ死ぬのなら、祖国の地で家族に見守られながら黄泉の国へと旅立ちたい。

王子は激情しやすい王を、命を賭けて解き伏した。

「君の国は十分な領地を得た。もういいではないか。祖国に帰ろう。君もわたしも愛する者の元へ帰るんだ」

ところが王は頷かない。

「臆したのか、君ともあろう者が。情けない。――ああ、良いとも。帰るがいい、君の国へ。ただし、わたしたちの友情もこれまでだ」

剣先をシルフの王子の喉元に突きつけるサラマンダーの王。

「君とならずと共に駆けられると思っていた」

「駆けられるとも」

「同じものを見て、同じように感じ、笑い、死が我々を別つその時まで共にいられると思っていた」

「いられるとも。君の子どもとわたしの子どもが共に大きくなっていく姿を、わたしたちは一緒に見守るんだ。やがて君には孫が生まれ、わたしにも孫が生まれる。わたしたちの国は栄え、今日のこの戦いをエール（酒）の杯を傾け、昔語りする時が来る」

王は頭を左右に振った。

「想像することができない」

「――帰ろう、共に」

「剣を振るい、他国を征服することの中にしか己の意義を見出せないんだ」

「君は王だ。君の国こそが君の意義だ。――さあ、帰るんだ。君の国に」

シルフの王子に説き伏せられ、サラマンダーの王はしぶしぶ兵を引く命令を出した。

だが、その夜、王の天幕に一人の男が訪れる。

男は王の臣下で、彼はシルフの王子が敵に通じていると王に諫言をした。

敵に通じているからこそ兵を引けというのだ、とその臣下は言い、王はそれを信じた。

だか、真実は、その臣下こそが敵に通じており、王と王子の仲を違えようと企んだのだ。

王子の裏切りに怒り狂った王がシルフの王子を殺せば、シルフの民がサラマンダーの王を許さない。

王はたちまち風に切り裂かれて命を失うだろう。

その男は最果ての国の王から、山のような宝石を贈られていた。



徹夜の練習のおかげか、ブロアのセリフに淀んだところはない。
演技もなかなかだ。

熱演する火の民の中、風の民とは言え、ブロアも熱演するしかないのだろう。

いよいよ劇はサラマンダーの王がシルフの王子に剣を向け、言い迫るところだ。

——なぜ裏切った。

ルীগがブロアに向かって剣を振り下ろす。
ブロアは剣を受け、横に流した。

キーン、と鳴り響いた剣は本物。
一つ動きを間違えればどちらかが本当に怪我を負ってしまう。
そんな緊迫したシーンだ。

「何のことだ？ 君を裏切った覚えはない！」

ブロアは必死に叫び、ルーグの剣をかわす。

「君を誰よりも信頼していたのに」

「わたしも君を誰よりも信頼している。どうしたんだ？ いったい
何があったんだ？」

黙れ、とルーグ。

彼の剣がブロアの躰を貫いた。

——という風に観客に見えるようにうまくブロアの脇の下を通す
はずだった。

ルーグの目が驚き見開く。

ブロアが動きを間違えたのだ。

刺してしまった。

本当に！

赤。

しだいに広がっていくものに、ルーグは動揺を隠せなかった。

崩れるように倒れたブロアの姿に悲鳴が上がる。

観客席からだ。

舞台裏からも息を呑む音が響き、ルーグも呼吸を忘れた。

血。

ブロアの紺色の衣装が見る見るうちに黒ずんでいく。

「ブロア！」

刺してしまった彼女の脇腹を押さえつけて、ルーグは悲鳴に近い声を上げた。

「しっかりしてくれ……」

ペシン。

頬が鳴る。

ルーグはハッとしてブロアを見下ろした。

「セリフを言え、早く。劇を台無しにするつもりか？」

「バカ野郎。劇どころじゃないだろうが！」

「私は大丈夫だ。血がベツタリで気持ち悪いだけだから。——だから、早く劇を終わらせてくれ」

そう静かに言って、ルーグの腕の中でブロアは瞼を閉ざした。

ズシリと、ブロアの重さが腕に染みる。

——こんなはずではなかった。

サラマンダーの王のセリフはまさに今のルーグの気持ちそのものだった。

「こんな風に君を失うなんて！　こんなはずではなかった。いったい誰が君をこんな目に遭わせたんだ？　君をわたしから奪い去ろうとする者をわたしは許せない。——わたしはわたしが許せない」

血に染まることも厭わず、ルーグはブロアを両腕で抱き締めた。
ぴくりともしない身体。

（嫌だ。ブロア！）

動かない身体を揺さぶって、叫ぶ。

（もう二度と剣は持たない。いや、持てない。命を失うということ
はこういうことなのだ）

剣は大切な者を奪う。

剣を向けた相手にも大切な者はいる。

また、その者を大切に思う者もいる。

他人の命を奪うことを許された者はいない。

大切なものを守りたいという気持ちは誰もが等しい。
それを奪って良いはずがない。
例えどのような理由があったとしてもだ。

頬を涙が伝う。

痛い。

半身を引き千切られたかのように痛むのは、心。

愚かだった己が悔しくて、半身を取り戻せるのであればどんな報
いも受けると天に祈る。

――が、天は静かだ。

やがて辺りは暗闇に包まれた。
舞台の照明が消されたのだと気付いた時、ルーグの心も暗黒に包
まれた。

だが、その時だ。

歌声が聞こえてきた。

それは火の旋律を奏で、美しく会場に響く。

どくん、とルーグの胸が高鳴った。

――彼女だ。

スポットライトの光が観客席からブリジットを探し出す。

再び点けられた舞台の照明は淡い。

哀しみの色に包まれたルーグは眩しいばかりのブリジットを見つめた。

それは、儚く美しいレクイエム。

しーんと静まりかえった会場に、ブリジットの歌声だけが響く。

ブリジットはけして美しい少女ではない。

だが、唄う彼女のこの存在感は何だろうか？

誰もが彼女だけに視線を注ぎ、その目を逸らせないでいる。

いつの間にか、ルーグの涙が止まっていた。



歌声は光の中に消え、やがて光も暗闇に溶けた。

幕が下ろされ、ルーグは腕の中の重みを思い出した。舞台の上は血だらけだ。

「……ブロア？」

呼ぶと、ブロアはぽちりと瑠璃色の瞳を開いた。
ルーグは驚愕する。

「ブロア、大丈夫なのか？」

「当たり前だろ？」

「けど、血が」

「莫迦。これは血糊」

「血糊？ そんなものを使う予定はなかったはずだ」

「ああ、なかったな。——けど、盛り上がっただろ？」

ブロアは得意げに脇腹に張り付けた袋をルーグに見せた。
ルーグの剣が裂いたそれは未だに赤い液体をドロドロと流し続け

ている。

「お前たちの劇は練習に練習を重ねて、ハプニングとは無縁だろ？
そんなのつまらないじゃないか？　——そうロクマリアに相談したら、血糊を使ったらどうだって。なるほど、って思っ、使ってみた」

「使ってみたって、お前……」

ホッとしたような、怒鳴りつけたいような。

ルークはわなわなと震えながらブロアの両肩を掴んだ。

「俺がどんな思いをしたか、お前、分かっているのか？」

「——悪かったよ。泣くとは思わなかった」

「泣くだろう！　俺はお前を殺してしまったのかと思ったんだ！
……ものすごく、怖かった」

俯いた赤髪を、ブロアは申し訳なく思っ、て撫でた。

「ごめん。もう二度としない」

「……」

「——きっと私もルークに死なれたら、泣くよ」

「……ああ」

ルーグは己の頭を撫でるブロアの手を捕まえると、その甲に唇を押し当てた。

くすり、と笑みを浮かべる。

「お互い血だらけだな」

「お前、今で顔にもついたぞ」

「はははっ。構うものか。今更だ」

言ってルーグはブロアに抱きつく。

まるで犬がじゃれつくように。

（ブロアが生きていてくれて嬉しい！ 彼女が大切に、掛け替えのない存在だから）

「やめろって。気持ち悪いんだよ、この血糊。匂いまで本物っぽいし」

「そうよ、やめなさいよ。それどころじゃないんだから！」

二人の頭上から不意に声が響く。

見上げると、アルティスが腰に手を当てて仁王立ちしている。

「劇はまだ終わっていないわよ。台本を思い出して！」

アルティスの台本によると、シルフの王子を失ったサラマンダーの王は、真の裏切り者は自分に諫言した臣であることを知る。彼を処刑し、再び敵国に攻め入る決意をするのだ。

だが、これは火のアラウダを欠いた台本だ。

本当のベルティネ祭の劇には更に続きがあり、結末はこうなる。

数年の月日をかけて最果ての国の城壁を破り、いよいよ国が滅びるという時、サラマンダーの王は歌声を聞く。

敵国の王女がサラマンダーの王の前に進み出て、レクイエムを唄ったのだ。

既に王女の父王は命を絶ち、民も皆、最期の覚悟をしていた。

王女の歌声は哀しく美しくサラマンダーの王の胸に響き、王は兵を引くことを王女に約束した。

「すぐに幕が上がるわ。ブロアは舞台脇に移動して」

「分かった」

ブロアはルーグの躰を押し退けて、立ち上がった。

「俺は？」

ブリジットが唄ったことで、事態は既に台本とは異なっている。本来の劇とも違う。

アルティスはにこりと微笑んだ。

「ルーグは幕が上がったら舞台から降りて、客席に。ブリジットの手を取って、こう言うのよ」

ルーグは頬を高揚させたアルティスを啞然として見上げた。

「大丈夫。今のルーグならきつとブリジットも拒まないわ。——今のあなたは素敵よ。かなり血まみれだけどね」

笑うアルティスにブロアも頷いた。

「ああ、そうだ。今のルーグなら、私はアミを引き受けてもいい」

「ブロア、その……」

「分かってる。お前は私のアミにはなれない。私よりも彼女を選んでいる。違う？」

「お前も大事だ。お前やロクマリア、アルメリア、みんな大事だ」

「それでいい。それでいいんだ、ルーグ」

ブロアが青髪をそよがせて、鮮やかに微笑んで見せた。

小さな足音が駆けてくる。

小さな少女はブロアの前まで来ると、心配そうな表情でブロアの

脇腹に触れた。

「ブロア、痛い？」

「大丈夫だよ、リール」

「でも、血がこんなに」

「これは血糊なんだ。――血糊、分かる？」

「嘘の血ってこと？」

「そうそう。怪我はしていないんだ」

それでもこの幼い少女の納得を得られず、ブロアは苦笑しながら服をめくって見せた。

血糊まみれの脇腹は、確かに無傷だ。

ホッと息を漏らすリール。

「心配したんだから」

「そうだね。悪かったよ」

苦笑してブロアは立ち上がった。

リールの小さな肩を抱き寄せ、ルীগに振り返る。

「しばらくは子守が大変なんだ。私だって、お前のアミにはなれない」

言って、リールと共に舞台脇に去っていった。



再び幕が上がった。

照明が皓々と照らしたのは、ルーグとブリジットの姿のみ。

ルーグはゆっくりと歩み出した。

舞台を降り、真っ直ぐにブリジットの元へ。

ブリジットが着た深紅のドレスはアラウダの衣装とは違う。
だが、彼女以外にルーグのアラウダはいなかった。

ブリジットの前に立ち、ルーグは彼女の手を取った。

「――君が、好きだ」

声が擦れた。

ブロアに対しては何度も言ってきた言葉だというのに、どうしてこんなにも違う響きに感じられるのだろう。

答えは易い。

ブリジットはブロアとは異なるからだ。

「わたしには君が必要だ。わたしと共にわたしの国に来て欲しい」

ブリジットの大きな瞳がルーグを見上げる。

「もしも君がわたしを拒んでも、わたしの兵が君の国を攻めることはない。わたしは祖国に帰り、一人で時を費やすだけだ」

拒まれることはない、とアルティスは言ってくれた。

ブロアも頷き、背中を押してくれた。

それでも、ルーグの膝は笑っている。

今はこの小さな少女が途方にもなく恐ろしかった。

拒まれたら、もう二度と‘たった一人’を選ぶことはできないだろう。

「――俺には君しかない」

呟くように口にした言葉は、ルーグの心。

あなたは、とブリジットの桜色の唇が開いた。

「哀しい人。私はあなたが愛おしくて堪りません。――ずっと遠くからあなたのことを見つめていました。あなたの哀しみを私の歌で癒せたらと、ずっと願っていました」

ルーグの咽が鳴る。

思いがけない告白だった。

信じられない気持ちに躰が震える。

ルーグは必死にその震えを抑え、彼女の前に膝を着き、彼女の手
の甲に唇を寄せた。

「側にいて欲しい」

「……はい」

歓声が沸く。

火のアラウダの手を取って、火のプリフェクトが再び舞台の上に
帰って行く。

その誇らしい姿を、火の学生たちは喝采を上げて見送る。

スポットライトが二人の後を追ひ、やがて彼らが舞台の上にたど

り着くと、幕が下りると同時に輝きを消した。



手が汗ばんでいた。
すぐ隣にブリジットがいることが、ルーグには信じられないこと
だった。

既に幕が下りている。
手を離すべきなのだろうが、できなかった。

離したくない。

訝しげなガーネットの瞳がルーグを映した。

「ブリジット」

ルーグは切なげに彼女を呼んで、その小さな軀を抱き寄せた。

悲鳴が上がる。

だが、それに拒絶はない。

驚いただけだ。

「ルーグ先輩？」

「ブリジット、君が好きだ」

「……私も好きですよ。先輩が戦場に行かないと約束してくださるのなら」

「戦場には行かない」

「戦争を煽る職は？」

「やめた」

「なぜ？」

「大切な者を失いたくない。――その想いは誰もが同じだ」

だから、と続けたルーグの言葉をブリジットは左右に頭を振るこ

とで遮った。

その答えで十分だった。

「先輩の傍にいます」

真っ直ぐに見つめてくる瞳がやがてゆっくりと細められ、近付けられたルーグの顔の影に覆われる。

そつと唇が重なった。

だが、一瞬。

慌てて彼女の軀を引き離したルーグの顔は赤い。

この現場をオルウエンが見ていたら床が抜けるほど地団駄を踏むに違いない。

彼が彼女を押し倒す日はまだまだ遠い先のことであるようだ。



ベルティネ寮に歌声が響く。

それは祭り前の差し迫るような歌声ではなく、穏やかで美しい歌声だった。

火のアラウダのブリジットが少女たちの中央で唄い、幾人かの赤髪の少女たちがその歌声に己の歌声を重ねている。

ルーグはそれをオルウエンの部屋で聞いていた。

「よく分かった」

不意にオルウエンが拳で己の手のひらを打った。

「お前は貧乳好みだったのだな」

「なんですか、それ」

「見ろ、ブリジットの胸の哀れなこと。私の乳を分けてやりたいくらいだ」

「そんな気ささらさないくせに……」

「当たり前だ。私がこの乳を養うのに日々どれだけ苦勞をしているのか。お前も、知らないだろう？」

「知りませんよ」

「ふふふっ。あんな小娘に私の大切な乳をやれるものか」

「……」

ルーグはうろんな目をオルウエンに向けた。

「もう行ってもいいですか？」

こんなところでオルウエンの相手をしているよりも、もっと近くでブリジットの歌声を聞きたかった。

だが、オルウエンは言った。

「これからが本題だ」

「早くして下さい」

「ほら、もう一度そこに座れ」

「長くなる話なんですか？」

「真面目な話だ」

いつになく真剣な顔に、ルーグは逆らうのをやめて椅子に腰を降ろした。

「お前、戦争を煽る職への志望願いは取り下げたんだろう？――」

これからどうするんだ？」

「それは今、考えているところです」

「そうか。それなら、王宮に上がれ」

「はい？」

冗談かと思ったが、オルウエンの表情は変わらず真剣そのものだ。

「前から思っていたんだが、お前は王宮騎士に向いていると思う」

「俺、もう剣は……」

「バカもの。お前から剣を取ったらいったい何が残るんだ」

「学術もそこそこできます」

「……そうだったな」

これは困ったとばかりにオルウエンは口をつぐんだ。
ルークは怪訝な表情をした。

「オルウエン先生は、俺に王宮に上がって欲しいんですか？」

「私がではなく、王宮がそれを望んでいる……らしい」

「何ですか、それ？」

オルウエンは立ち上がり、窓を閉めた。
歌声が途切れ、室内は沈黙の支配を受ける。

「ここだけの話だ。どうもエーディン女王の容態が思わしくなくらしい」

「本当ですか!？」

「しっ。大きな声を立てるな。――エーディン女王には子がない。王宮は次期王に相応しい人物を急遽捜し、この学園で見出した」

「この学園に？ 次に王になる者がこの学園にいるってことですか？」

「そうだ。――そこで若い王の側近になるべく者としてお前たちプリフェクトが選ばれた」

「俺たち？ ブロアやロクマリア、アルメリアも？」

「今ごろあいつらも話を聞かされているはずだ」

信じられないと、ルーグはオルウエンの顔を見つめ返した。

「それで？ その、次の王になるとかいう者はいったい誰なんですか？」

「さあ、そこまでは私にも分らん。卒業するまで極秘を貫くつもりらしい。――ただ一つ分かっていることは、王位に一番近い者に

は右の手の甲に王家の紋章が現れるらしいってことだ」

「王家の紋章？ 現れるって？」

「痣のようなものらしい。私もよくは知らん。——いいか、くれぐれも捜そうとするな。もしお前が王宮に上がることになれば、自然と知れることだ。そして、もし王宮に上がらないとなれば、顔を拝むことも適わないお方だ。お前には関係がない」

「そうですけど……」

ルーグの冴えない表情を見やり、オルウエンは苦笑した。

「まだ卒業までには時間がある。王宮騎士とは言わない。王宮に上がるのか、それとも別の職に就くのか、ゆっくりと考えればいいだろう」

オルウエンの部屋を後にして、ルーグはベルティネ寮の中庭へと急いだ。

ブリジットが気付き、唄いながら笑みを浮かべた。
極上の微笑み。

彼女はけしてすぐれた美貌の持ち主ではない。
だが、どうして、唄う彼女の眩しさは、ルーグの目に滲みるのだろうか。

ルーグも微笑み返し、ゆっくりと彼女に歩み寄った。

【第二の季節 おわり】

第三の季節：土

（前編）

かの地は神々に愛され、次から次へと神の訪れを受けていた。

そうして、彼らは四番目に訪れた一族で、かの地でつかの間の安息を得、次に訪れた一族に追われ、ティル・ナ・ノグへと逃れた。

ティル・ナ・ノグ。

——そこは、永遠の楽園。

尽きることのない食料と飲み干すことのできないエール（酒）。
老いを知らぬバード（吟遊詩人）がハープ（豎琴）を奏で、英雄
たちが憩う。

美しく、喜びに溢れた地。

だが、それでも彼らはかの地を恋し、憧れた。



何度同じ話を聞かされたことだろう。

その度に吐く息は重く、心は深い闇に落ちていく。

関係ない。

知らない。

——そう言い捨て、耳も目も閉ざしてしまいたい。

大地に沈む何かが自分を呑み込めばいい。

——いや、突風に攫われるか、大火に焼かれるか、洪水に巻き込まれればいい。

消えてしまいたい。

死んでしまいたいわけではない。

最初から存在しなければ良かった。

ため息。

ロクマリアはハツとして、フリディスに目の焦点を合わせた。

彼女の髪はすでに銀髪とは言えない。

艶のない白髪は頭の後方で団子のように編まれている。

常に穏やかで、負の感情をけして表情には出さない彼女のことをロクマリアは好いていたが、彼女の根気強さだけは煩わしく思っていた。

何度もしてきた話だ。

何度も断り、何度も首を横に振った。
それでも彼女には諦める様子がない。

「考え直しませんか？」

「……」

「なぜ、墓守なのです」

「先生は、もし俺が他の職を選んでいたら賛成して下さいましたか？」

「何も知らなかった時でしたら、賛成したでしょうね」

「それは……」

卑怯だと言いかけて、ロクマリアは口をつぐんだ。

「墓場にはオーク（魔物）が出ると言うのではないですか」

「オークには幼い頃から狙われてきました」

「死者の眠る地です。寂しい場所ですよ？」

「静かな場所です」

「静寂を望んでいるのですか？」

頷かなかった。

だが、おそらくそうなのだろうと、ロクマリア自身は思っている。

左手が右の手の甲を押さえた。

白い手袋。

その下には複雑な文様が描かれている。

肌に金糸で刺繍したかのようなそれは、光を反射してキラキラと輝く。

半年ほど前に突如として現れ、次第に色濃く、今や人前に出る時は手袋で隠さなければならぬくらいにハッキリと浮き出て見える。

痣だ。

そう見えなくとも、痣より他に言い表せる言葉がない。

フリデイスに痣の存在を知られたのは三ヶ月前のことだ。

そして彼女はロクマリアの前に膝を着き、擦れた声でこう言った。

「――それこそが王家の紋章」

ディアントス（撫子）をモチーフにしているとも、古き文字を隠したデザインをしているのだとも言われている。

王家の紋章。

それは現在、王宮の主であるエーディン女王だけに許されたもの。彼女に万が一のことがあれば、虚空に彷徨うことになるだろうとも言われているものである。

ところが、それは今、ロクマリアの左手にもある。

エーディンの死を察したディアントスが次の主を見出していたのだ。

「なぜ俺なのでしょうか？」

両親の顔は朧気だ。

祖父母の顔は知らない。

——だが、その見知らぬ祖母が、どうやら先々王の妹だったらしい。

わずかな時間を共に暮らした兄はそのことを誇りに思っていた様子だったが、ロクマリアには何の感慨も湧かなかった。

祖母が先々王の妹だからと言って、何かを優遇されるわけでもなく、王宮に招待されるわけでもない。

親子の縁さえ薄いというのに、祖母の何が自分たちに力を及ぼすというのだろうか？

まるで関係のないことだと思っていた。

ところが、ロクマリアには祖母を同じくする従兄がいて、不幸なことに、彼は自分たち兄弟のことを強く意識をしていた。

デュース。

錆色の髪に、シグナルレッドの瞳。

彼はエーディン女王に世継ぎがないことをひどく気にしていて、事あるごとに己の才覚を示したが、ロクマリアの兄と対立していた。

そして、ある日、ロクマリアの兄はオークに襲われ、命を落とした。

「兄が生きていたら、ディアントスを選んだのは俺ではなかったのかもしれない」

フリデイスは柔らかに微笑んだ。

「わたしには分かりません。ですが、あなたをプリフェクト（監督生）に選んだのはわたしですよ、ロクマリア。——そして、それは、あなたが時期王になるべく者だと知っていたから選んだわけではありません。あなただからです」

「プリフェクトに選ばれた理由も分かりません」

「困った子ですね……」

ため息。

だが、フリデイスは笑みを崩さない。

「あなたにはまだ時間があります。もう一度よく考えて下さい」



ルグナザド寮。

その中庭に突如と生えた大樹。

——林檎の木である。

夏、大いに緑を茂らせたその隙間から赤い実が除く。
歩み寄る途中でロクマリアはメンヒルに気付いた。

彼女は精一杯手を伸ばし、林檎をもぎ取ろうとしていた。

——だが、届かない。

腰まであるシルバーブロンドや身体の線の細さは、彼女を儚げに見せるが、彼女の行動までもそのように見せることはできない。

ロクマリアはギョツとして歩みを止めた。

林檎に手が届かないと知った彼女が、幹によじ登ろうとしている

ではないか。

「メンヒル、やめるんだ」

「ロクマリア？」

振り返った彼女はロクマリアの鉛色の瞳と目が合うと、気まづそうに俯いた。

「そんなに林檎が食べたいのか？」

「違うわ。とても綺麗だから、手にとって眺めたかったの」

「綺麗？　——ああ、確かに綺麗だ」

「ルーグがよく身に着けている宝石みたいね」

「ルビーか？」

「そう、ルビー。——なぜかしらね。私ったら、あの激しい色に憧れてしまうの」

ロクマリアはメンヒルの傍に立つと、片腕を持ち上げた。

「——届かないか」

だが、と地面を蹴った。

枝が大きく揺れ動き、ガサガサツと音を立てた。

「すごいわ。ありがとう」

ハラハラと葉が舞う。

林檎と共にもぎ取ってしまったそれらに申し訳なく思いながら、ロクマリアは赤い実をメンヒルの両手に乗せた。

「お礼に唄いましょうか？」

「そうだな。唄ってくれ」

言って、ロクマリアは大樹の根元に腰を降ろした。

「だが、俺は目を閉ざす」

「あら？　寝てしまうの？」

「いや。ちゃんと聞いているから、気にせず最後まで唄ってくれ」

「ええ、分かったわ」

ロクマリアが瞼を閉ざすと、メンヒルは彼の前に立ち、両腕を広げ唄いだした。



「おい、ブロア。あそこを見てしろよ。祭りの最中だって言うのに、シケタ顔をした奴がいるぜ」

甲高い声にロクマリアは不快を露わにした。

瞼は開かず、近寄ってくる小さな気配を耳だけで探った。

「放って置けよ、ルーグ。時間がないんだろう？」

「そうだ。時間がない！」

「お前は早く花火の準備に取りかかれよ。代わりに私があいつの様子を見に行つてやる」

「なんだよ、それ？ ずるいぞ、ブロア！」

競争するかのように駆け寄ってくる足音。

ロクマリアは驚いて、開けるつもりになかった目を開いた。

「あつ。お前、どっかで見たことあるな。……誰だっけ？」

真っ先に飛び込んできたのは燃えるような赤い髪。
悪意の欠片もない瞳がロクマリアを見つめている。

彼の方には覚えがないようだが、ロクマリアの方は彼に覚えがあった。

風の民と火の民、土の民、そして水の民が合同で行う授業で、何度か顔を合わせたことがあるからだ。

——確か、火のルーグだ。

もう一人は空色の髪を持っている。

男の子かと思ったが、よく見れば女の子だ。

ロクマリアはこちら女の子のこともよく知っている。

——風のブロア。

入学直後から飛び抜けて目立っていたルーグにアミ（恋人）の契約を迫られている風の少女として有名だ。

ブロアの瑠璃色の瞳がロクマリアを映す。

彼女はロクマリアに気が付いたようだ。

「確か、お前は……ロクマリア？」

仕方なく頷くと、ブロアは怪訝な顔をした。

「こんなところで何をしている？ 祭りの最中だぞ？」

「興味がない」

「興味がない？ お前、ベルティネ祭がつまらないって言うつもりか！」

怒鳴ったのはルーグだ。

ベルティネ祭は火の民の祭りであるからだ。

ロクマリアは言い方を誤ったことを認め、頭を左右に振った。

「ごめん。そういう意味ではないんだ」

「――なら、どういう意味なんだ？」

ロクマリアが素直に謝ったことで、ルーグはすぐに怒気を引っ込めた。

ルーグの方こそ根が素直なのだ。

ブロアが小首を傾げる。

「みんなと騒ぐのが嫌いなのか？」

「そういうことなのかもしれない」

「自分のことなのに曖昧に言うんだな」

「本当は嫌いではなかったのかも知れないからだ。一人でいよう、

一人でいないと、と思う内に大勢の中にいることが煩わしくなったのかも知れない」

うーん、と二人は低く唸って、眉を顰めた。

「お前がなんで一人でいなきやと思うのかが分からない」

「二人はつまらないぞ？」

「気楽でいい」

「いや、つまらない！——だってさ、一緒に花火を見て、綺麗だなあって言い合えないじゃないか」

「あつ。ルーグ、花火を上げないと！」

「そうだ！ 上げないと！」

二人はあたあたとロクマリアから離れた。
だが、すぐに振り返り、自慢そうな声を響かせる。

「俺はオグマからの絶大な信頼を得ているんだ。だからこうして花火を上げる役目を与えられたんだ」

「ルーグはオグマと同室だもんな」

オグマ。

——今年の火のプリフェクトの名前だ。

オグマと同室だという。

それは、火のプリフェクトに認められ、弟のように可愛がられて
いるということであり、いずれ火のプリフェクトに選ばれる可能性
があるということだ。

ロクマリアはルーグを手伝うブロアを見やり、首を傾げた。

「なぜ、風の民に手伝わせるんだ？ 花火の準備なら、火の民の十
八番だろう？」

「今日は風が強いだろう？ ——風が強いと、花火が上げられない。
ブロアにはこの辺一帯の風を止めて貰うために来て貰ったんだ」

「なんだって？ この辺一帯の？」

確かに今日は風が強い。

こども強くては花火を上げるのは危険だ。

そして、風の民であれば、風を吹かせることも、止めることも、
容易なことだろう。

だが、自分と同学年である幼いブロアが、どれだけの範囲の風を
止めようというのだろうか。

ブロアがそれほど強い力が操れるとは、思えなかった。

よし、と言ってルーグがブロアを振り返った。

頷き、ブロアは高く片手を夜空に掲げた。

音が止む。

驚いてロクマリアが辺りを見回した時、風が一切の動きを止めた。

得意げな声上がる。

ルーグのものだ。

「ブロアはシルフたちに愛されているんだ。――俺にはよく見えな
いんだけど、聞いた話だと、ブロアの周りにはシルフがウジャウジ
ヤいるらしいぜ」

「ウジャウジャとか、嫌な表現するな」

「俺の周りにもサラマンダーがウジャウジャいるぜ？」

「サラマンダーはウジャウジャで良し」

そんなやり取りの後、ルーグの指が鳴り、花火が打ち上げられる。

二つ、三つ。五つ、六つ。

次々と、休む間もなく夜空に炎の華が咲いていく。

月明かりのみだった辺りが昼のように明るくなった。

「口開けてると、火の粉を口の中に入るよ」

振り返ると、いつの間にかブロアがすぐ隣に立っていた。そして、
鮮やかに微笑む。

「ほらな。楽しいだろう？」

「……」

「花火ってさ、きつと一人で眺めていても綺麗なんだけど、一人では楽しくないんだ。――音がうるさいだけだ」

言って、ブロアはケラケラと笑った。

火の粉が舞っている。

ルークは喜んで火の粉の下を駆け回っているが、ブロアは指先で風を操り、自分とロクマリアに火の粉が飛んでこないようにしている。

（そうかも知れない。一人は味気ない）

頷きかけて、ロクマリアは緩く頭を左右に振った。

「なぜ？」

「俺と一緒にいると、死ぬ」

「まさか」

「危険なんだ」

「危険？」

聞き返してきたブロアに何と言って説明しようかと眉を寄せた時、甲高い声が響いた。

「ルーグ！」

振り返ると、漆黒の髪を乱しながら駆けてくる少女の姿があった。
水のアルメリアだ。

「花火を上げる時は水の民と一緒にでないとダメって先生方から言われているでしょう？」

「げっ。アルメリアだ！」

「げって何よ。げっ、て！」

アルメリアがふくれっ面になって両腕を高く空に上げている。

「待て。俺が逃げてからだ！」

最後の花火が打ち上げられた瞬間、アルメリアの両腕が振り下ろされた。

ザバァー。

バケツをひっくり返したようなという喩えが実に相応しい雨。
それも、花火の打ち上げ跡とルーグの周りだけに集中している。

「痛っ！ よせ、アルメリア。もう十分だろ！」

激しく落ちてくる大粒の雨は、ルーグの軀を強く打つ。
ただでさえ、火の民の濡れ鼠姿は情けないものがある。
痛みに表情を歪めているルーグは哀れに見えた。

「アルメリア」

ブロアが止めて、ようやくアルメリアは腕の力を抜いた。
雨が止む。

情けない顔のルーグがブロアとロクマリアの元に戻ってきた。

「大丈夫か？」

「俺のサラマンダーたちがみんな逃げちゃった」

「お前が軀を乾かせば帰って来るさ。――ほら」

ブロアはルーグの顔の前に手を広げ、穏やかな風を彼に送る。
しばらくして、サラマンダーが戻ってきたらしく、ブロアの風は
熱風に変わった。

そうなれば乾くのは早い。

あっという間にルーグは元気を取り戻した。

アルメリアも三人の元に歩み寄ってきて、ブロアの傍にロクマリアの姿を見つけると、驚いたように黒曜石の瞳を大きくした。

「珍しい人と一緒にいるのね？」

「二人はすぐにパーティー会場に戻る」

「あなたは？」

「……」

答えないロクマリアの代わりにルーグが乾いた声で答えた。

「もちろん、ロクマリアも戻る」

「俺は……」

「戻るだろ？ 一人はつまらないって分かったんだから」

ブロアも言い、更に何かを言いかけた彼女を風が制した。

ザワリ、と草木が風ぐ。

ロクマリアはハッとして辺りを見渡した。

「逃げるんだ」

「なんだって？」

「早く！」

ギョツとしてルーグはロクマリアの顔を見やる。

そうして、真剣そのものの鉛色の瞳と視線を合わせた。

「オークだ。祭りに惹かれてやってきたんだ」

ルーグはそう言ったが、ロクマリアにはそうとは思えなかった。

祭りに惹かれてやって来たと思わせて、デュースがロクマリアを狙って送り込んできたに違いない。

幼い頃からそうだった。

今この時まで生き残っている自分が不思議なくらいに、デュースはロクマリアの命を狙って幾度もオークを差し向けてきた。

（ああ。こんな時に）

このままではルーグたちを巻き込んでしまう。

これはデュースと自分との問題だ。

誰も巻き込めない。

（だから、ずっと一人でいることを選んできたのに）

「逃げろ！」

「お前は？」

ロクマリアは逃げない。

ローブの下から銀色の短銃を取り出し、三人を自分の背中へと押しやった。

「よくあることなんだ。幼い頃からずっと狙われてきた」

「オークに？」

「君たちを巻き込みたくない」

「それが一人でいる理由か？」

何かが駆けてくる。

小物だ。

——だが、自分を守り、更にルーグやブロア、アルメリアまでも守ることはできない。

足が竦んでしまったのだろうか。

逃げない二人に絶望しながら、ロクマリアは短銃を構えた。

飛び出してきたオークは骨と皮しかない醜い姿をしていたが、やはり小物。

子どもである自分ともさほど大きさが変わらない。

（大丈夫だ。勝てる）

そう思った時だった。

「ブロア！」

「ああ」

ロクマリアを押し退け、オークの前に立ちふさがったのはルーグだ。

ブロアも片手を夜空へと掲げている。

「我が風は、汝の敵に炎を導く」

「炎よ、我らの敵を焼き尽くせ！」

巻き上がった熱風に、ロクマリアは両腕で顔を前で交差させる。
細めた目に赤々とした竜巻が暴れているのが映った。

「……すごい」

無意識に口から出た感想だった。

振り返った二人が得意そうにロクアリアに笑みを向けた。

「だろ？　――だからさ、難しいことはよく分かんないけど、俺たちがいるからお前は一人でいなくていいんだよ」

「そうだよ。私たちは、あのくらいのオークを怖いとは思わない」

「お前は俺たちのダチだ。俺のダチが一人でいるな」

差し出された手。

ロクマリアはその手のひらとルーグの顔を見比べた。

ブロアを見やる。

それから、アルメリアを。

「ルーグがダチだって言ったら、そうなんだ」

「そうね。ルーグが言ったのなら、そうなのよね。――いらっしやいよ、一緒に。こんなところに一人でいて、またオークに襲われたらどうするの？」

戸惑うロクマリアに再びルーグが手を突き出した。
力強く。

「来いよ。俺たちは絶対に死なないし、ずっとお前と一緒にいてやるから」



気が付くと、メンヒルの顔を目の前にあった。
ロクマリアが鉛色の瞳を大きくすると、彼女は吹き出した。

「今、眠っていたでしょ？」

「……」

「いいんだけどね、べつに」

「悪い」

「疲れているの？」

「いや」

違うと言いかけて、そうなのかも知れないと思う。
ため息が漏れた。

（よりによってあの時の夢を見るなんて）

「もう少し眠っていたら？」

「そうだな。――メンヒル、君は卒業したらどうするんだ？」

「種を育む職に就くわ」

即答して、メンヒルはシルバードロンドを掻き上げた。
一つに束ね、頭の後ろで高く結い上げる。

「本当ならアミであるあなたに付き合って、墓守でも何でも一緒に
やってあげたいところだけれど」

「構わない」

「そう言うと思ったわ。――少し寂しい」

ぽつりと零された言葉にロクマリアの胸は鷲掴みにされた。

だが、今の自分には彼女に対して言ってもやれる優しい言葉はない。
立ち上がり、尻に付いた泥を払うメンヒルを目で追った。

「あら？ アルメリアがこっちに来るわ」

メンヒルの視線の先を見やると、確かにアルメリアだ。
黒髪が穏やかに揺らいでいる。
急ぎの用ではないらしい。

「きつとあなたに用ね。それじゃあ、私は行くわ」

「ああ」

軽く手を振って、あっさりとメンヒルは去っていった。
残されたロクマリアはアルメリアの到着を待つ。

アルメリアは小首を傾げた。

「邪魔しちゃったかしら？ ごめんなさいね」

「いや。どうかしたのか？」

「相談があるのよ」

ブロア然り、ルーグ然り。
なぜか彼らはロクマリアに相談を持ち込む。

ブローアが持ち込んでくる相談は単純明快で良いが、ルーグやアルメリアに関しては何も言ってやれない場合も多かった。

特に、アルメリアだ。

どこら辺が相談だったのかさえも分からない時がある。

ロクマリアは先程までメンヒルが腰を降ろしていた大樹の根を視線で指し示し、アルメリアを座らせた。

「あなた、卒論は何を書くのか決まった？」

「この時期にテーマすら決まっていけないのは風の民くらいなものだ」

「そうね。書き始めていないといけない時期ですものね」

「アルメリアは何を書くんだ？」

彼女の表情が変わった。

どうやらこの辺りに今回の相談の核心がありそうだ。

「雨の降り方について。……でも、本当は違ったのよ」

「違った？」

「本当に書きたかったのは、オークについて。——だけど、サヴリナ先生からの許可が下りなくて」

「オークの何について書きたかったんだ？」

アルメリアは周囲に視線を巡らせてから、低めた声でロクマリアに告げた。

「オークの元が何かってことよ」

右の手の甲が熱を持った気がして、ロクマリアはそこを押さえた。気のせいではない。

チリチリと痛む。

「オークはオークとして生まれてくるわけではないっていうのが、私の考えなの。——リールのウンディーネがオークになってしまったのを覚えているわよね？ ウンディーネの深すぎる愛が彼女をオークにってしまったのよ」

「アルメリア」

ロクマリアは片手で彼女の口を制した。

「それを追求することは禁忌に触れる」

「けれど、不安なのよ。——想いの深さがオークに変えてしまうとしたら」

首を横に振る。

アルメリアの次の言葉は知れた。

想いを持っていること。

そのことが、オークになり得る可能性をも持っているのだとしたら、自分たちもあのウンディーネのようにオークになる時が来るか

もしれないということだ。

「想いを残した死者はその魂を彷徨わせるわ」

そして、やがてその魂はオークと呼ばれるものになる。

「なぜ私たちは親子の縁が薄いのかしらって、考えていたの。――私も母親の顔なんて覚えていないわ。けれど、一つだけ。母親がいつも身に着けていた耳飾りを覚えているの。何の変哲もない耳飾りだったから、どこにでもあるものなのかもしれない。――けどね、同じ物を耳に飾っていたオークを、見たことがあるのよ」

「それはいつのことだ？」

「もうずいぶんと前のことよ。ルーグの炎が跡形もなく燃やしちゃった。――もしかしたら、あの時のあのオークは私の母親だったのかもしれない」

「莫迦なことを言うな」

「でも……」

アルメリアの黒曜石の瞳が潤みを帯びている。

己でもそれに気が付き、気まづくなったのか、ふいっとロクマリ
アから目を逸らした。

「どうしてかしらね。この地にずっといれば幸せだって分かっているのに、私たちはこの地を後にするの。花を散らせたり、雨を降ら

せたり。かの地の一部になりたくて、駆け回るの」

「君は賢すぎる」

「だからなのかしら？ 成績が優秀である者がプリフェクトに選ばれるのは、気付いてはならないことに気付いてしまうから？ 過去のプリフェクトたちが王宮に上がる道を選んだのは、彼らも気付いてしまったからなのかしら？」

「アルメリア、君は王宮に上がりたいのか？」

ふっとアルメリアの瞳が色を増した。

ロクマリアに振り返る。

「——そうなのかも知れないわね」

でも、と地面に向かって小さく呟き、木々の慰めを聞いて、仰ぐ。

緑色の天井。

茂った葉の隙間に赤い実が見える。

「私ってダメね。ブロアがいないと何も決められないみたい」

「いや、それは違うな。君は自分をよく知っている。ブロアがどうしようと、最後には結局、君は君の道を選ぶだろう」

「……そうだといいのだけど」

「君の不安は、かの地に行ったブロアがオークになってしまうことだ。違うか？」

「ブローアだけではないわ。ルーグも、あなたもよ」

「皆が皆、オークになるとは限らない」

「私たちはかの地を追われた存在。だから、かの地では存在し続けることを許されていないのよ。それでも無理してかの地に留まろうとするから、存在を歪められるの。――オークになってしまうのよ」

右の手の甲が痛みを放つ。

ディアントスがアルメリアの話を嫌っている証拠だ。

「この話はもうよそう。アルメリア、君は王宮に上がれ。気が付いてしまった君が、気付く前の君に戻ることは不可能だ」

無言で頷いたアルメリアに、ロクマリアは心から安堵した。

だが、ディアントスの痛みはしばらく治まらなかった。

第三の季節…土

(後編)

ルグナザド祭の劇は、サラマンダーの王がノームの国に攻め入ったところから始まる。

舞台照明は赤く。

役者は皆、悲痛な声を上げる。

この劇においてサラマンダーの王はロクマリアに、サラマンダーの王というよりも、オークを思い起こさせた。

あれは7年前。

この劇を初めて見た時、ロクマリアもアルメリアと同じことに気が付いた。

まるでオークのようなサラマンダーの王。

この劇は、サラマンダーの王がオークと化してしまったことを意味しているのではないだろうか？

インボルグ祭の劇もそうだ。

あの劇ではまさにウンディーネの女王が海の怪物に変身をした。

変身と言葉を濁しているが、つまり、オークになったのだ。

ウンディーネの女王をオークにしてしまったのは、シルフの王女の美しさへの嫉妬だ。

サラマンダーの王も己の欲を満たすために、オークと化してノームの国に攻め入った。

負の想いが彼らをオークにしている。

この隠されたメッセージに果たしてどれほどの者が気付いたのだろうか。

アルメリアのように、自分のように。

ロクマリアは白地に銀糸の刺繍の入った衣装を身に着け、舞台に歩み出た。

禍々しく赤いガウンを身に着けたルーグがゆつくりと、ロクマリアに振り返った。



プリフェクトとアラウダは、祭式時は正装が決まりとなっている。

ただし、正装と言っても、衣装のようなもので、偉大なる過去の誰某が実際に着る者の気持ちなどこれっぽっちも考慮せずに好き勝手にデザインしてくれたものだ。

アラウダ（歌姫）はまだ良い。

何種類かあるそれらはどれも清楚な感じのドレスだからだ。

対してプリフェクトの衣装は、これでもかと言うくらいに豪華な装飾が施されたガウンに、同じくこれでもかと言うくらいの宝石が散りばめられた帽子。

先端に大きな宝石を取り付けられた杖を左手にすることを義務づけられている。

ロクマリアが劇の衣装から祭事用の正装に着替え、パーティー会場に戻ってくると、すでにルীগは祭事用のものに着替え、仲間たちの輪の中にいた。

正装のアルメリアも水の学生たちと会話に花を咲かせている。

ブロアの姿を捜して視線を漂わせると、苦もなく空色の髪を見つけることができた。

小さなリールを旁らに、己のアラウダのドレスを指差して笑っている。

ブロアのアラウダはハルという名の少年で、風の民の怠慢さがそ

のハルにドレスを着させ続けている。

過去にアラウダに選ばれた少年がいなかったわけではないのだから、少年用のアラウダの衣装は、捜すべき場所をちゃんと捜せばあるはずなのだ。

そこを捜さないのが風の民である。

哀れなハルは今回も似合いすぎる女装姿を余儀なくされていた。

ロクマリアは純白のドレスに身を包んだメンヒルの手を取って、土の民の元へと歩み寄った。

彼らは皆、それまでの動作を止め、二人を振り返った。

アラウダの歌が終わり、プリフェクト主演の劇が終わると、個人の楽しみを追う時間となる。

つまり、プリフェクトが主催となって催しを取り仕切るのは劇までだ。

パーティー自体はダラダラと、夜明けが訪れるまで続けることを許されているが、実際に暁を見る者は少ない。

多くの者が劇を見、しばらく仲間内で会話を楽しみながら食事をすると、部屋に引き上げて行く。

ロクマリアもメンヒルと一曲踊ってから早々に自室に戻ろうと考えていた。

毎年そうだ。

とりあえず楽しんでる姿を皆に見せておけば、誰かを悲しませることはないだろう。

曲が始まった。

はっと息を呑む音が聞こえ顔を上げると、火のプリフェクトが己のアラウダの手を引いて、中央に歩み出していた。

彼らが優雅に踊り始めたので、誰もが視線を奪われた。

（先を越されたか）

すらりと背の高いルーグと小柄だが凜としたブリジット。

ロクマリアとて、彼らの隣でダンスする気にはなれない。

今夜は誰からも注目されていない内に姿を消してしまおうか。

ロクマリアはごく自然な仕草でメンヒルの手を離すと、そつとパーティー会場から抜け出した。



ルグナザド祭の劇は、戦争の非情さを知ったルーグにとって、皮肉な役回りとなった。

戦争を好むサラマンダーの王。
争いごとを忌むブリジットは、そんな役を演じているルーグをどんなに心を痛めて見つめていただろう。

劇の練習時からルーグに対して申し訳ない気持ちで一杯だった。

なので、今夜の主役を奪われようと構わないという思いがある。

ロクマリアは寮の中庭へと足を運んだ。

月光。

あれほど実っていた林檎が、いつの間にか、一つも見あたらない。

気が付くと一つ消え、また一つ消え。

誰かが大樹の前を過ぎる度にその数は減っていった。

自室に戻るには時間が早い。

月明かりを大樹と共に眺めようかと、歩み寄った時だった。

低い唸り声。

ドキリとして、ロクマリアはそちらの方に目を投じた。
ガサリ、と植え込みが鳴る。

黒い影が姿を現せ、やがて影は子牛くらいの大きさの犬となった。

大きさもさることながら、赤く輝く瞳を見れば犬ではないことは分かる。

オークだ。

ロクマリアは杖を地面に放ると、ローブの下から短銃を取り出した。

ガサリ。

草が上げた悲鳴に思わず、正面のオークから視線を外してしまった。

（他にもいたのか）

ロクマリアの銃は威力こそ絶大だが、単発銃だ。
複数の敵を相手にすることはできない。

正面に一頭。

いや、更にその後ろにもう一頭。

左側面に二頭。

そして、右側面にもう一頭。

計、五頭のオークが相手だ。

冷や汗が流れた。

おそらくこのオークたちもデュースがロクマリアに差し向けてきたものだ。

初めの頃、デュースのオークは知能もない小物ばかりだったが、年齢と共にデュースの力が増したのか、近頃では確実にロクマリアの命を狙ってくる厄介なオークを送り込んでくるようになった。

それも今回のように複数いることが多くなった。

（オークを操るだなんて）

もちろん禁忌だ。

オークの主となった者が闇に心を奪われずにいられるわけがない。

（そうまでしてデュースは王位が欲しいのだろうか）

それほどまで欲しているのならばいっそくれてやりたい。

ロクマリアさえいなければデュースは自然の成り行きのように玉座に座れたはずだ。

（自分さえいなければ、デュークをこれほどまでも追い込むことはなかった）

自分の命を狙うオークを目の前にして、いつもそのようなことをロクマリアは思ってしまう。

オークの姿が醜ければ醜いほど、デュースの心が闇に囚われてい

るようで、哀れを感じてしまうのだ。

影が飛んだ。

右側面の一匹が飛び掛かって来、ロクマリアの右肩を狙った。

ロクマリアは短銃でそれを叩き落とすと、次に飛び掛かってきた正面の二頭に発砲した。

弾丸は二頭を貫いた。

立て続けに倒れたオークたちを確認する間はない。

左から飛び掛かってきた一頭を避け、瞬時に地面から杖を拾い上げると、その背に突き立てた。

そうして振り返った時、最後の一頭が目前にいた。

ダン。

血がわずかに散って、オークの悲鳴が上がる。

見やると、地面にオークが一本の矢によって動きを封じられていた。

「ロクマリア！」

銀色の矢を見てすぐに気が付いた。

メンヒルだ。

容姿とは裏腹に活発な彼女が射た矢は見事にオークの横腹を貫き、

尚かつ、地面に突き刺さっている。

「メンヒル、なぜここに？」

「あなたが一人で会場を抜け出すのを見つけたから、追ってきたのよ。またオークに襲われたの？　どうしてオークはあなたばかりを襲うの？」

「それは――」

予感がして振り返ると、最初にロクマリアが拳銃で叩き落としたオークが躰を起こしており、今にも二人に飛び掛かろうとしていた。

瞬時に大地に両手を着き、己のノームに願う。

願いを聞き入れたノームはロクマリアとオークの間に堅固な壁を造った。

土壁に弾かれたオークが悲鳴を上げる。

その隙にロクマリアは短銃に弾丸を詰めた。

ガアン、と響く。

一度だけ。

オークの血で穢れた大地を見下ろし、ロクマリアは苦々しく顔を顰めた。

「あとでルーグに頼んで、死体を燃やして貰おう」

「そうね。それからフリデイス先生に報告しないと」

「フリデイス先生には……」

ハッとしてロクマリアは空を仰いだ。

月が影に覆われ、一瞬、その輝きを失った。

「あれは何？」

黒い大きな鳥。

いや、オークだ。

下半身は確かに鳥のようだが、上半身は気味の悪い女の姿をしている。

「誰かいるわ。オークの背に誰か乗っている」

「メンヒル」

逃げろ、とロクマリアは声を上げた。

嫌な予感がする。

ロクマリアのノームもメンヒルのノームも落ち尽きなく空と二人を見比べている。

今にも逃げ出しそうな様子だ。

右の手の甲が痛んだ。

ディアントスが危険を知らせている。

「メンヒル、行け！」

影が急降下した。

ざわり、と風が吹き下ろして来て、メンヒルは地面に尻を着いた。彼女に覆い被さったロクマリアの背が鋭利な傷を負う。

笑い声。

低く、咽に絡むような声だ。

「久しぶりだな、ロクマリア」

仰ぎ見ると、錆色の髪とシグナルレッドの瞳が闇に禍々しい光を放っていた。

「デュース！」

「お前は本当にしぶとい奴だったが、それも今夜で最期だ。この俺が直々に殺しにやって来たのだからな！」

ロクマリアは背筋を凍らせた。

数年ぶりに見るデュースの姿だったが、彼はその時とまるで変わらない姿をしている。

七年前、デュースは火のプリフェクトに選ばれることを望んでいたが、選ばれたのは彼ではなくオグマだった。

彼は怒り、オグマと彼をプリフェクトに選んだ者たちに対して呪いの言葉を吐いて、学園を去っていった。

あの時の姿のまま。

何一つ変化のないその姿は、成長もなく、老いも見えない。

ディアントスが熱を持つ。

デュースという歪んだ存在を忌んでいるのだ。

デュースが片手をロクマリアの方と広げた。

「業火よ、焼き尽くせ」

パチンと鳴った指の音と共にロクマリアの足下から炎が吹き上がる。

炎の柱に包まれた躰は、ノームの防御がなければおそらく一秒と保たなかっただろう。

ロクマリアを愛するノームが逃げ出したい気持ちを抑えて、必死にロクマリアを守ろうとしているのだ。

だが、デュースの炎は禍々しく強い。

ノームの悲鳴を耳にして、ロクマリアは覚悟した。

「ロクマリア！」

滝？

いや、違う。大量の雨だ。

ずぶ濡れになった躰を感じて、ロクマリアはアルメリアが駆け付けてきてくれたことを知った。

「お前はまさかデュースカ！」

息を呑む音。

ルーグが夜空を仰いで、声を荒げている。

「学園を去ったお前がなぜここにいる！——オークを操っているのか？」

「なんて恐ろしいことを……」

アルメリアの驚愕した声の響きに、オークの背に乗った青年は嗤う。

「ロクマリア。お前は実にしぶとい。——次に会う時こそ、お前の最期だ」

がなり声。

耳に痛いそれがオークの啼き声なのだと気が付くのに時間を要した。

一同が両手で耳を覆っている間に、大きな影は月光に溶け、やがて見えなくなっていた。

肩に手を置かれ、ロクマリアは大丈夫だとその手の甲に己の手を重ねた。

「心配を掛けたな、ブロア。ルーグも。——助かったよ、アルメリア」

「そんなことよりもそろそろ教えて欲しいわ」

「そうだ、教えろ。なぜデューズがお前を殺そうとするんだ？」

怒ったようなルークの声音にアルメリアは眉を顰める。

彼を制して、静かに言葉を紡いだ。

「私たちはずっとあなたに聞かずにきたわよね？　どんなに聞きたかったか、あなた、分かる？　私たちはあなたのことが大好きだから、心配なのよ。——いつかあなたから話してくれるものだと思っていたわ。どうしてオークはあなたを狙うのか……」

「ロクマリア、もっと私たちを信じてくれてもいいんじゃないのか？」

「——信じているよ」

ロクマリアは重ねたブローアの手を軽く叩いて、顔を俯かせ、微笑んだ。

ブローアは首を傾げる。

「だったら、話してくれるのか？」

「ああ。——けど、巻き込むことになる。巻き込まれたくなかったら、今の内に俺から去ってくれ」

「馬鹿野郎！　今更何言っているんだよ。もうずっと前から巻き込まれっぱなしだ。それに約束しただろ？　ずっと一緒にいてやるって」

不機嫌そうにルーグは腰に両手を置いた。

「大丈夫だ。俺たちはそんなにヤワじゃない」

頷くブロアとアルメリア。

少し離れた場所にメンヒルが立っている。

ロクマリアは決意して、白い手袋を外した。

現れたディアントス。

神々しい光を放ち、一同を圧倒させた。

言葉を失った彼らの中で、真っ先に我に返ったのはアルメリアだった。

「ディアントス。――王家の紋章だわ」

「まさか」

「ううん、間違いないわ。王家の紋章よ」

「それじゃあ、ロクマリアが……」

ルーグは数ヶ月前にオルウェンから聞かされた話を思い出した。

「……王？」

月明かりよりも更に眩しいディアントス。

それが物語ることは一つしかない。

ロクマリアが王となるべく者なのだ。

「デュースは俺の従兄だ。血筋だけを見れば、彼と俺は同じ。同じだけ玉座に近い。――それなのに、ディアントスを選んだのは俺だった」

「だから、デュースはあなたの命を狙うの？　デュースがオークを？」

頷くロクマリアに、アルメリアは絶句する。

「オークを操るなんて！」

「俺がそこまでデュースを追い詰めたんだ」

「あなたのせいではないわ」

「けれど、俺がいなければ」

「違う！」

荒げた声は驚いたことにメンヒルのものだった。

彼女は己の肩にかかったシルバールブンドを払いのけ、ロクマリアに真っ直ぐな瞳を向ける。

「あなたがいなくともディアントスはデュースを選ばなかったわ。デュースが闇に落ちることを、ディアントスは知っていたからよ」

「そうだな。ディアントスはデュースを選べなかった。デュースがデュースだからだ。――選ばれなかったことを理由にあそこまで堕ちる者を王に据えることはできない。当然だ」

メンヒルの言葉にルーグも頷く。
だが、彼女の言葉を更続いた。

「ロクマリア。あなたはあなただからディアントスに選ばれたのよ。きっとあなたは、もしもディアントスに選ばれなかったとしてもデュースのようにはならなかったでしょうから」

「……俺は玉座には興味がないから」

「そうよ。だからよ」

「いや、違う。玉座はより強く望む者が手に入れるべきものなんだ」

望まぬ者が玉座に着くよりも望んだ者が玉座に着いた方が、その責務を正しく遂行するのではないだろうか。

嫌々行ってしまうかなるような生やさしいものではないのだ、王というものは。

しかし、アルメリアが首を横に振った。

「確かにそうしてうまくいくこともあるわ。けれど、ダメよ。だって知っているでしょう？ 強すぎる想いはその者をオークにしてしまうのよ。――デュースの想いは、もはや欲。その欲に幼い頃から立ち向かってきたあなただからこそ王に相応しいのよ。ディアント

スがあなたを選んだ理由がそれよ！」

ロクマリアは目を見開いてアルメリアの顔を見つめた。

「君は俺に王になれと？」

「あなたが私に王宮に上がれと言ったのよ？　そうして自分は静かに墓守をしているつもり？」

切りかえされて、ロクマリアは吹き出した。

心外そうに眉を寄せるアルメリア。

「あなたを一人にするつもりはないわ。これからずっとね。――
そうでしょう、ルーグ？」

「そうだな。王宮勤めっていうのも悪くないかもしれないな。オル
ウェン先生にも勧められているし」

「ルーグって未だにあのデカ乳に頭が上がらないんだな」

「怒ると怖いんだよ。手に負えないんだぜ？　――そういうブロア
はどうするんだよ？　アフアン先生から教師として学園に残るよう
言われているんだろ？」

「言われているけど、言われているだけだ」

「なんだよ、それ？」

「まだ決めてないんだよ。アファン先生もいい加減な人だから言っているだけで、当てにならないし」

ブロアは両腕を組んで顔を顰めた。

けど、と言ってロクマリアに振り返る。

右手を開いて、差し出す。

「もしもロクマリアが王になるのなら、王宮に上がってもいい。ロクマリアが私を必要とするのなら、ずっと側にいてもいい」

風の民は縛り付けられることを好まない。

自由を好む気質は、生まれ落ちた時から死の迎えがくるまで変わりようがないからだ。

それでも――。

ロクマリアはしばらくの間その手とブロアの瞳を見比べ、そして、ずっと右手を持ち上げると、ブロアの手を握った。

パチン。

二人の重なった手に更にルークが音を立てて手を重ねた。

微笑み、アルメリアも重ねる。

「きっとあなたは良い王になるわ。デュースには誰もいないけれど、あなたは一人ではないのだから」

そう穏やかな言葉を零し、最後にメンヒルが重ねた。



窓の外をヒラリヒラリと雪が舞っている。

積もることはなく、次から次へと暖かな大地へと溶けていった。

初雪が訪れた日、エーディン女王が姿を隠した。

女王の遺体はウィスプ（光の精霊）たちによって、いずこかの世界へと運ばれてしまうので、こういう言い方をする。

ある日、突然、容態の悪かったはずの女王が寝室から消えている。それに気付き、一通り騒ぎ終えた後、王宮の者たちは彼女の死を悟るのだ。

彼女の死は、ロクマリアが学園を卒業する時まで隠される。また、ロクマリアが次王であることも卒業まで隠される。

だが、エーディンの死後、ロクマリアのディアントスはますます輝きを増し、白い手袋では到底隠しきれなくなっていた。

輝きは生地を通してなお強く、くつきりと紋章を形取っている。

たちまちロクマリアのことは知れ渡った。

学生たちはロクマリアを遠巻きにし、――かと言って、放って置いてくれない。

ある者はロクマリアの姿を見つけると、それまでのおしゃべりを止め、口を閉ざし、顔を伏せた。

そして、ロクマリアが通り過ぎると、たちまちヒソヒソと言葉を交わしだし、いつまでもロクマリアの姿を目で追い続けるのだ。

また、ある者は、用もないのにロクマリアの側をうろつく。ロクマリアが話しかけると、脱兎の如く逃げ出すのである。

変わらないのはブローとルーグ、アルメリア。

そして、メンヒルくらいなものだ。

――お前は俺たちのダチだ。

――ルーグがダチだって言ったら、そうなんだ。

――そうね。ルーグが言ったのなら、そうなのよね。

幼い頃に交わした会話は、何年という月日経っても、色褪せていない。



ロクマリアはフリディスに呼ばれ、彼女の部屋に向かった。

扉を叩くと、彼女は席を立ってロクマリアを部屋に招き入れてくれた。

「王宮騎士団がデュースのことを追っています。直に捕らえられるでしょうが、その報告があるまであなたは一人歩きを避けて下さいね」

ロクマリアを先に椅子に座らせると、向かい合うように彼女も腰を降ろした。

「王宮があなたの護衛にと、騎士を数人貸し出すと言ってきているのですけど……」

「不要です。ずいぶんと学園の警備を強化して下さったようなので十分です」

「そうですか。……他に何かありましたら遠慮しないで言って下さいね」

「はい」

ロクマリアは早々にフリデイスの部屋を去りたかった。

すっかりよそよそしくなってしまった彼女との会話は苦痛でしかない。

だが、そんな彼の気持ちを知るよしもないフリデイスはロクマリアを引き留め、次王の生活に不自由がないことを一つ一つ確認した。

彼女の部屋は学園校舎の西側。
地下にある。

物静かな場所からようやく出て、石段を上がると、西校舎と中央の校舎を繋ぐ回廊に出る。

回廊には簡易な屋根があるのみで、左右の壁がなく、開けた景色を眺めながら歩くことになる。

しばらく行くと、シルバールンドが円柱に背を預けながらロクマリアを待っていた。

普段は雪のように白い頬が上気し、林檎のように赤い。彼女の手を取って、ロクマリアは顔を顰めた。

「どのくらい待っていたんだ？」

「それほどでもないわよ」

「こんなに冷えている」

「仕方ないわ。雪が降っているんですもの」

「雪が降っているのに、こんなところで待っているな」

「あなたが私の歌を聴きたいんじゃないかと思って」

「……」

ロクマリアはメンヒルの手を引いて歩き出した。

ルグナザド寮のサロンならば、一日中、暖炉に火が入っている。一刻も早くこの冷えた軀を暖めてやりたかった。

「ねえ？」

「何だ？」

「王宮にも歌を唄える者が必要かしら？」

ロクマリアは先を歩き、彼女を振り返らなかった。

繋いだ手から、自分の熱が彼女に移ればいいと思っていた。

さあな、と短く答え、そうして微笑む。

「王宮にはどうか知らないが、俺には必要だろうな」

【第三の季節 おわり】

第四の季節：水

（前編）

人間の男に恋をしたウンディーネは、人間となるために一つの条件を吞まされる。

——もしも男がお前を裏切ったのならば、お前はその男を殺し、水に戻らなければならない。

ウンディーネの想いは永遠だが、人間の想いは刹那の戯れ。

多くの場合、ウンディーネの恋は儚く終わり、水に戻った彼女たちは恋しい男のすべてを忘れた。



沈黙すると、しんしんと雪の積もる音が聞こえる。

ふと、アルメリアはサヴリナ越しに窓の外に視線を投じた。
銀世界。

大地はもちろん、屋根も。

サウイン寮の中庭中央を陣取る噴水さえも白で覆われている。

自分の大好きな場所でさえこうなのだ。

彼の愛する場所も同様に埋もれていることだろう。

ルグナザド寮の中庭に佇む大樹。

その根元に腰を降ろし、瞼を閉ざしている彼。

——ロクマリア。

空気の動きを察して、アルメリアはサヴリナに視線を戻した。

静かな黒い瞳がアルメリアを見つめている。

「すでに決まったことだ」

言い切られた言葉に、アルメリアは激昂する。

「ですが、サウイン祭の劇には土のプリフェクト（監督生）が出演するという決まりがあります。ずっと守られてきた決まりです！」

「ロクマリアは劇には出ない。これもトムナフリー学長が決められた決まりだ」

ぐっと咽が鳴る。

悔しくて。

「サヴリナの静か過ぎる口調がアルメリアの心を凍らせる。

（だけど、諦めきれない）

「ブロアとルークと私、そしてロクマリアが、今年のプリフェクトです。他の誰かであってはならないのです！」

「お前の気持ちは分かる。だが、アルメリア。お前は王位に着く立場にある者に、劇に出ろと言うのか？　それも、サウイン祭の劇。ノームの青年の役だ」

「ロクマリアはロクマリアです。少なくとも彼が学園を卒業する時までは、私たちにとって……」

「お前はそう言うが、誰もがお前のように思っているとは限らない。彼は我らの王だ」

「……っ！」

それでも、と言いかけて、言葉を吞んだ。

おそらくサヴリナの言うとおりなのだろう。

王となる立場にあるロクマリアを、サウイン祭の劇に出させるわけにはいかない。

しかも、ノームの青年の役で。

サウイン祭の劇の主演は、ウンディーネの王女だ。
ノームの王子に恋をして、地上で生きることを望む。

ウンディーネの王は王女が海を去ることを許すが、一つだけ条件を出した。

——もしも、かの王子がお前の想いを裏切った時は、お前は王子を殺し、海に戻って来なければならない。

かくして、ウンディーネの王女は陸に上がり、ノームの王子の元へと向かった。

王子は王女に愛を語ったが、彼が王女に欲したのは彼女の想いでなく、ウンディーネの国の知識だった。

彼は問う。

お前の国はどのような国なのか、と。

やがて王女は王子の意図に気が付いた。

彼が自分を側に置くのは、自分を愛しているからではない。

彼女の祖国を侵略しようとしているからだ。

そうと知ってもまだ彼女は王子を信じていた。

いつかきっと本当に愛してくれる日がくる、と。

ところが、王子は彼女ではなく、ノームの娘を結婚相手に選んでしまった。

怒りと悲しみに心を染めた王女は、王子を王子の国ごと海に沈めた。

——悲恋の物語だ。

どうして一年の締めくくりの祭りなのに、このような悲劇をやらねばならないのか、理解に苦しむ。

しかも、よりによってサウイン祭の翌日が卒業式なので、劇の後味の悪さを引きずったまま卒業することになる。

だけど、何となく、今のアルメリアには分かる。
四つの祭りの四つの劇はそれぞれ戒めなのだ。

負の心がその者の姿をオークに変える。

その事実を隠しながら、四つの戒めを学生たちに与える。

そうして、最後の戒めがサウイン祭の劇。

——ウンディーネの悲恋。

劇を見た多くの学生たちはノームの王子の非道さを罵り、ウンディーネの王女の哀れさに涙を流すが、はたして本当にそうなのだろうか？

アルメリアは思う。

サウイン祭の劇では、ウンディーネの王女が想いを裏切られた腹いせにノームの王子を彼の国ごと海に沈めてしまった点に、気が付かなければならないのではないだろうか。

どんなに苦しくても、悲しくても、命を奪っても良いはずがない。それなのに、彼女は、王子は疎か、彼の国の民すべての命を奪ったのだ。

サヴリナのため息が呆れを含んで響いた。

「国を失うノームの王子。そんな役をロクマリアに演じさせるのは無理だ。分かるだろう？ それはあまりにも不都合が過ぎる」

アルメリアは無言で頭を下げ、サヴリナの部屋を去った。



廊下に出たアルメリアを穏やかな微笑みが迎えてくれた。

やや紫を帯びた黒髪を長く伸ばした水のアラウダ（歌姫）。

——マグエヴァだ。

「待っていてくれたの？」

「ええ。手を繋いであげましょうか？」

差し出された白い手に少し苦笑して、アルメリアは彼女の手を握った。

不思議なもので、幼い頃から彼女の体温を感じると、ホッとするのだ。

「サヴリナ先生は何て？」

「駄目って」

「どうしても？」

「ええ。どうしても」

「彼が出たいと言っても？」

「彼は出たいと言うかしら？」

マグエヴァのオニキスの瞳が大きく開かれる。

「彼の気持ちを確かめていないの？」

「だって、当然出てくれるものだと思っていたんですもの。まさか先生方から出演不可が出るなんて思ってもいなかったわ」

「それこそ当然だと思うわよ。だって、彼、王位に着くのでしょうか？」

囁めた声。

言ってからマグエヴァは辺りの様子を窺った。

アルメリアは軽く鼻を鳴らす。

「関係ないわ」

手を繋いだまま廊下に行く。

どうやら教室の方に足が向かっているようだ。

八年生のこの時期にもなると、ほとんど授業は無い。
用のないはずの場所なのに、習慣のように足が向いてしまうのが可笑しかった。

「アルメリアは卒業したら、王宮に上がるの？」

「ええ。マグエヴァは朝露をつくる職に就くのでしょうか？」

「そうよ。希望が通って嬉しいわ」

「ウークベアは？」

「彼も一緒よ。私のアミですもの」

当然だとマグエヴァは言って、笑った。

——原則的に、アミ（恋人）は同じ職に就くことになっている。

「結局、あなたたちみんな王宮に上がるのね？」

「結局そうだったわ。ルーグもブロアも」

「ホッとしているでしょう？」

「私が？」

思わずマグエヴァの顔を振り返る。

彼女は目を細めて微笑んだ。

「ええ、そうよ。あなたホッとしているわ。これから先もずっと彼らと離れることがないから」

握っているマグエヴァの手を意識して、力を強める。

「卒業したら、あなたとはお別れだわ」

「仕方ないわ。そういうものですもの」

「私が王宮に上がったら、偶然かの地で会うってこともないのね」

「そうね。でも、私は、きっとあなたは王宮で頑張っているのだと思って、安心できるわ。——例え顔が見えなくとも、相手の居場所が分かっているって、素敵ね」

「私はあなたの居場所が分からないわ」

「朝露が落ちている場所が私の居場所よ」

「きっと私は、あなたの居場所を知れば会いたくなるわ。会えないって分かっているけどね。――それに、こうして手を繋ぐこともできないわ」

「寂しい？」

「ええ、寂しいわ」

ふっ、とマグエヴァは笑う。

「仕方ないわ。それが大人になるってことですもの」

下級生たちの授業が響く廊下。

教室の並びを抜けて、広場に出た。

そこは学生たちのちょっとした憩いの場となっている。

マグエヴァのオニキスの瞳がきらりと輝いた。

「ウークベアだわ！」

見やると、少年がこちらに向かって手を振っている。

サラサラと流れる黒髪。

顔立ちは整っており、動作は軽やか。

そんな彼の唯一の欠点は、年齢の割に背が低いということだ。

少女であるブローよりも頭一つ分低い。

マグエヴァと並ぶと、双子のようになった。

「それじゃあ、アルメリア。またね」

パッと、マグエヴァの手がアルメリアの手から離れた。

ウークベアの元へと駆けていく己のアラウダの背を見送りながら、アルメリアは思わず胸を押さえた。

失った暖かさに、胸が詰まる。

見知らぬ土地に一人で放り出されたような気分。

寂しい。

けれど、これは自分で選んだ寂しさだ。

半年前、マグエヴァはアルメリアの手を取って言ったのだ。

——私のアミになってくれない？

アルメリアはまず言葉を失い、次に表情を無くした。

凍り付いた二人の空間。

やがて、マグエヴァが笑い声を上げた。

まるで泣いているかのような笑い声。

——私、ウークベアとアミの契約を結ぶわ。

幼い頃からいつだって一番近くにいてくれた親友。

これから先もずっと当然のように側にいてくれると思っていた。

そんなわけがないのに……。

その時から、マグエヴァの一番はアルメリアではなくなった。

後悔しているのではない。

その証拠に今だって、アルメリアは仲良く並ぶ彼らに微笑んで、片手を振ることができる。

手を振って、背を向け、二人から立ち去る。

後悔なんてできる立場にないのだ。

アルメリアがマグエヴァを選べなかったのだから。

アミはどうしてもブロアだと思っていた。

ブロア以外いない、と。

——水の民のあなたが、風の民のブロアを想い続けることは辛いことなのよ？

風の民は一つの場所に居続けることができない。

学園からだって、しょっちゅう誰かしらが脱走している。

それを連れ帰るのが風のプリフェクトの役目でもある。

——風の民だって、想い続けられることは重荷なのよ。彼らはアミとしては最悪かつ最低な相手よ。

幾度もマグエヴァはアルメリアに、ブロアのことを諦めるように忠告した。

それでもアルメリアは諦められなかった。

——そんなにブロアがいいの？　ブロアが好き？

「好き。すごく好き」

呟くと、すぐさまアルメリアの言葉は廊下の静けさに溶けた。そうして、彼女は誰も聞いていない呟きを更に放った。

「だけど、違うのよね」

歩みを止めぬまま、どこに向かおうかと頭を巡らせる。

ふと目を向けた窓の外に燃えるような赤髪を見つけて、アルメリアは足を止めた。

銀世界の中、元気いっぱいに駆け回っている火の民の少年たち。どうやら、雪の玉を投げ合っているようだ。

体育の授業が雪合戦になったのかと思ったが、少年たちの学年はバラバラだと気付く。

ルーグの姿を見つけて、アルメリアは小首を傾げた。

「ただ遊んでいだけなのかしら？」

そうだとしたら、自分がそこに行っても邪魔にはならないだろう。行く先を見つけてアルメリアは再び歩み出した。

ルーグがブリジットをアミに選んだ時、アルメリアは裏切られた思いがした。

不思議な思い。

裏切られたなんて、そんなこと思う必要なんてないのに……。

ルーグは入学した当初からずっとブロアにアミの契約を迫っていた。

だから、彼も自分と同じくらいにブロアのことが好きなのだと、アルメリアは信じていた。

同士のような気さえしていた。

それなのに……。

——寂しい。

ルーグの隣にブリジットの姿を見つけると、胸が締め付けられる。ルーグの一番はもうブリジットなのだと思い知る。

そう言えば、ロクマリアがメンヒルとアミの契約を結んだときも胸が切なく泣いた。

彼とアミになりたいだなんて思ったことないのに。
どうして……？

荒涼とした大地に自分一人。
見上げる限りの広い空。

前に進もうと足を動かすが、ぴくりとも動かない。

見下ろすと、両足の自由を水の鎖が奪っている。

——どこにも行けない。私一人。

風が吹く。

ブロアの風。

置き去りにされた。

空の果てが赤く燃えている。ルーグの炎。
届かない。

大地には草も花も生えていない。
ロクマリアが見捨てた大地。
私まで見捨てられた気分になる。

廊下をひたすら行きながら、アルメリアはぐつと胸を押さえつけた。
た。

孤独という名の負の感情が今にも堰を切って溢れそうだった。



校庭に出ようとして、アルメリアはふっと歩みを止めた。
足が動かなくなったのだ。

火の民の少年たちが急に言い争いを始めて、すぐにそれは取っ組み合いになった。

気付いてルーグが仲介に入る。

まだ幼い少年たちをそれぞれ片手で摘み上げると、ゴツンと彼らの頭をぶつけ合わせた。

ルーグは笑う。

喧嘩がしたいのなら自分が相手になると言っ

て、不意に悲鳴が聞こえて、アルメリアは頭上を仰ぎ見た。
ギョツとする。

少女が空から真っ逆さまに落っこちて来ている。

「リール！」

悲鳴に近い声に、その少女がリールだと気付かされる。声の主はブロア。

もうダメだ、地面に激突する、とアルメリアが瞼を閉ざした時、風が素早く動いた。

瞼を開くと、ブロアが空中でリールの身体を受け止め、両腕に抱いていた。

アルメリアは胸をなで下ろした。

「ブロア、リール、大丈夫なの？」

「アルメリア？　そこにいたのか。――まずいところを見られたな。風の民が風から落っこちるなんて」

苦々しそうにブロアが言う。

アルメリアだけではなく、少し離れた場所には火の民の少年たちもいる。

おそらく彼らにも見られてしまったことだろう。

「怪我はないのね？」

「ああ。大丈夫だ」

「リールはまだ自由に空を飛べないの？」

「ううん。でも、シルフの機嫌が悪い時はうまくいかないの」

「今日はシルフの機嫌が悪いのかしら？　まだ喧嘩をしたりするの？」

「時々ね。……実は今朝も」

「喧嘩しちゃったの？」

「うん。でも、前よりはずっと仲良くなったんだよ」

「そう。よかったわね」

鮮やかに青いリールの髪。

ウンディーネにも愛されたその色を、アルメリアたち水の民も好ましく思っている。

半ば無意識にリールの頭を撫でると、ブロアに向き直った。
ブロアは首を傾げている。

「何かあったのか？」

「何かって？」

「何かだよ。嫌なこととか……」

「私、どこかへん？」

「泣きそうな感じ」

「ブロアって、鈍いくせに鋭いのね」

「どっちだよ」

膨れたブロアに、アルメリアはそっと笑った。

ふと、ブロアはリールに視線を落とし、幼い彼女の背を軽く叩いた。

意を察したリールは火の民の少年たちの方へと駆けていく。

彼らは風の民であるリールを歓迎して、競って自分の方の陣営にと勧誘しだした。

ますます雪合戦は白熱しそうである。

しばらく小さな姿を見守ってから、アルメリアは静かに言葉を紡いだ。

「ブロアはもう誰かとアミの契約を結んだの？」

「いや、まだだよ。——と言うか、アミを持つつもりはないんだ。アファン先生から聞いたんだけど、王宮に上がるのならアミを持つ必要はないだってさ」

「正確には、かの地に行かないのなら、よ」

アミと職を見つけることが、学園の意義だとされている。

職とはかの地での役割であり、かの地へ向かう目的でもある。

どうしたわけか、自分たちはかの地に憧れを抱いてしまう。

だが、その昔かの地から追われた自分たちは、かの地において正常な姿を保ち続けることを困難とする。

オークとなってしまうその時を少しでも遅らせようと考えられたのが、目的意識を持つこと。

——職。そして、アミ。

アミは恋人や伴侶を意味しているが、仕事上の相棒という意味もある。

そのため、アミが異性である必要はない。

ずっと一緒にいたいたった一人。

以前のアルメリアは、アミをそのように解釈していた。

ところが、アミの本当の意味は、互いを見張り合うための相手だ。恋人だの、伴侶だの、そんな甘いものではない。

負の感情に支配されそうになった時、思い止まることの出来るか否かを左右する存在なのだ。

「どうして気が付かなかったのかしら？」

今となつては不思議で仕方がない。
アルメリアはくすりと笑った。

「サヴリナ先生も、アフアン先生も、学園の先生方は皆、アミを持つていないわ。かの地に赴かないからよ」

「そう言えばそうだな」

学園の教師は皆、プリフェクト経験者だ。

ならば、かの地では負の感情がその者をオークに変えてしまうことを知っていても何ら不思議ではない。

そして、だからこそ学園の教師となり、この地に残っているのか
もしれない。

「ロクマリアはメンヒルを王宮に迎えるそうよ」

「へえ」

「ルーグも。王宮に勤めている者のアミも王宮で働くことを許されているから、ブリジットも学園を卒業したら王宮に上がると思うわ」

「アルメリアは？」

「私は……」

——マグエヴァはウークベアとかの地に行く。

アルメリアは黒曜石の瞳をブロアに真っ直ぐと向けた。

「私もアミは持たないわ。必要ないもの」

言って、どこかで何かが吹っ切れた気がした。
清々しい。

「ごめんなさい、ブロア。私、あなたのことをずっと苦しめていた」

私のアミになって、とは一度も口にしなかった。
けれど、届いていたはずだ。

「もっと早くに気が付けば良かったのに。私ってば意外と莫迦なのよね」

ブロアは何も言わず、ただ苦笑した。
アルメリアはホッと息を漏らす。

「ロクマリアがメンヒルを選んだとき、捨てられた気分になったの。ルーグがブリジットを選んだとき、ブリジットがとても憎く思えたの。——可笑しいでしょう？ 私、ロクマリアやルーグのアミになりたかったわけじゃないのよ。そんなこと少しも思ったことないし、彼らのどちらかのアミになった自分を想像すると、鳥肌が立っちゃうくらいなの。つまりね、私は、二人が私から離れてしまうのが嫌だっただけなの。子どもっぽい独占欲よ。——嫌だわ。私って、ガキよね」

大樹に背を預けているロクマリア。

その足下に自分が腰を降ろし、半ば口喧嘩になっているブロアとルーグのやり取りを見守っている。

幼い頃の懐かしい時間にはもう戻れない。

前に進むしかない。

自分一人で。

「私、ブロアが好きだわ。ルーグやロクマリアと同じくらい。それから、ルーグやロクマリアのことも好きなの。ブロアと同じくらいに。二人もあなたのことが好きで、だから私、ブロアが私のアミになってくれたら、もれなく二人もくっついてくるんじゃないかって思ったの。ずっとみんなと一緒にいられるんじゃないかって」

ガキよね、とアルメリアは再び呟いた。

「ロクマリアは玉座に。あなたもルーグも私も王宮に。一番近くてわけにはいかなくとも、離れ離れではないんだって思ったら、ふっと心が軽くなって、どうしてもあなたのアミにならなきゃって気持ちが薄れちゃったみたいなの」

「それでいいんだよ」

「私の想い、重かったでしょ？ サウイン祭の劇のウンディーネの王女みたいに、あなたを海に沈めたいとも思ったのよ？」

「嫌だな。それは」

「あなたを海に閉じ込めれば、ルーグやロクマリアも海に来てくれるかしら？」

「来ないよ。助ける見込みがあれば別だけど、アルメリア相手ならまず適わないからな」

「ルーグは特に？」

「そう、ルーグは特に」

ニカツと笑うブロア。アルメリアもつられて笑った。

「王宮に上がったら、改めてゆっくり本当に好きな相手を探すわ。いい？ ブロアも探すのよ！」

「えー。私も？」

「当たり前じゃないの。いい男っていうのはね、努力して捜さないと見つからないものなのよ。私、次こそはちゃんと恋愛をするわ。もれなく誰かがついてくるような相手じゃなくてね」

「あははは」

不適切な笑い声に、アルメリアは片眉をつり上げた。
ブロアは笑い顔を凍らせる。

「いいわよ、そうやって笑ってなさいよ。必ずブロアよりも素敵な人を見つけてみせるんだから」

「――その言い方は二重の意味に捉えられるぞ、アルメリア」

突然降って湧いた低い声にアルメリアは驚いて、後ろを振り返った。

すると、いつの間にかルーグがそこに立っていた。

「ブロアが見つけた相手よりもアルメリアが見つけた相手の方が素敵なのか、アルメリアが見つけた相手がブロアよりも素敵なのか、どっちだ？」

「うっ」

後者の意味で言ったのだが、少女であるブロアをこれから見つけ出そうとしている男性と比べるのは些か可笑しい。

かといって、今更、前者だと言い張る気持ちにもなれない。

答えに詰まってアルメリアは咽を唸らせた。

「それから、アルメリア」

ルーグの腕がずっとアルメリアに向かって伸びてきて、パチン、と彼女の額で彼の指が鳴る。

弾かれた額がじわりと熱を放った。

「痛っ」

何をするのよ、と怒鳴りかけた口はすぐに閉ざされた。
ルーグの瞳がいつになく真剣だったからだ。

「確かに俺の一番はお前じゃない。ロクマリアやブロアの一番もな。――けど、俺たちはこれから先もずっとダチだ。それは変わらない。お前は、一人じゃない」

「ルーグ……」

「おいこら、なんて顔してんだ？　これからロクマリアのところに
行こうっていうのに、そんな顔じゃ、あいつにまで心配されるぞ」

「ロクマリアのところ？　なぜ？」

「サウイン祭の劇のこと、聞いた。オルウェン先生もどうしようもないことだって言ってた。――けど、諦められないだろ？」

「……うん」

「確かに、王になるような奴にあんな役やらせられないっていうのは分かる。けど、ノームの王子の役はその年の土のプリフェクトが演じるのが決まりだ。決まり、決まりって、うるさく言いたいわけじゃない。ただ、ロクマリア以外の奴に、土のプリフェクトがすべきことを任せるのが嫌なんだ。――あいつしかいないんだ。俺たちのとつての土のプリフェクトは」

アルメリアは長身のルーグを仰ぎ見て、瞳を大きくする。

自分が言いたいことは口にしなくとも、すでにルーグには伝わっていた。

彼の隣を見やると、ブロアも頷いている。

アルメリアは淡く微笑んだ。



冬以外の季節ならば、ロクマリアの居場所は容易に見当が付いた。
大樹の根元である。

ところが、今は冬。
雪が降り積もり、大樹も雪に覆われている。
そこに彼がいるはずがなかった。

「これだから冬は嫌いだ」

「あら、楽しそうに雪で遊んでいたじゃない」

「俺はガキどもの面倒を見てただけだ」

「そうだったかしら？」

「あ。いた」

今にも火事か洪水かが起こりそうだった二人の間で、ブロアの人差し指が空を差す。

ルーグとアルメリアは次に吐くはずだった罵声を吞み込んで、ブロアの指先に視線を投じた。

上級生専用の休息室。

——別名、昼寝部屋。

部屋の中を覗き込むと、長椅子に横たわり、静かに瞼を閉ざしているロクマリアの姿があった。

長椅子に歩み寄り、ロクマリアを見下ろすと、ルーグは悪態をついた。

「呑気に寝てやがる。俺たちがどれだけ捜したと思っているんだ」

「——何か用か？」

「なんだ、起きていたのか」

怠慢な動作でロクマリアは上体を起こした。

三人の顔を順に見やる。

そして、彼は尋ねる相手を見極めた。

「どうかしたのか、アルメリア？」

「サウイン祭の劇のことで……」

「劇？ 練習の日程のことか？」

「違うわ。――あなた何も聞いていないの？」

「何を？」

訝しげなロクマリアの顔に、アルメリアは眉を顰めた。

「聞いていないのね。――あなたはサウイン祭の劇に出ることを禁じられたのよ」

「なんだと？」

「あなたが王だから、あなたにノームの王子の役はやらせられないって」

「いったい誰がそんなこと」

「先生方よ。トムナフリー学長も」

「学長まで？」

信じられないとロクマリアの鉛色の瞳がアルメリアの顔を伺う。

やがて、彼の鉛色は細められた。

俯き、考え込むように右手を顎の下へと運ぶ。

「あなた、どう思う？」

「そうだな。先生方の考えも理解できなくもない。学生の中にだって、同じように感じている者もいるだろうし」

——直に王となるロクマリアに劇なんてさせられない。

当然の思いだ。

アルメリアは胸元を握り締め、黒曜石の瞳をロクマリアに向けた。

「あなたは？ 劇に出たい？」

パツと彼が顔を上げる。

鋭い眼の輝きに、アルメリアはドキリと胸を突かれた。

「俺は今の今まで出るつもりでいた。出ないことなんて考えられない」

「じゃあ」

「ルグナザド祭ではルーグに嫌な役を演じさせてしまった。サウイン祭では俺の番だ。格別劇に出たいというわけではないが、出ないわけにはいかないだろう？」

パチン、とルーグの指が鳴った。

「そうきたら、次は直談判だ！」

「直談判？」

首を傾げたのはブロアだ。

ルーグは大仰に頷いた。

「プリフェクト四人で学長室に乗り込むのさ。俺がいて、ブロアがいて、アルメリアがいて、おまけにロクマリアまでいれば、何だっ
てどうにかなるさ」

ルーグがきっぱり言い切ると、本当にそうである気がしてくる。

だからなのか、ブロアはいつも言う。

「ルーグがそう言うなら、きっとそうなんだ。どうにかなるさ。――
行こう、学長室に」

ブロアが行くのならアルメリアも行く。
三人が行くのなら、ロクマリアだって。

彼は苦笑して長椅子から立ち上がった。

第四の季節…水

（後編）

雪が音を呑み込んでいるからではない。

この部屋が静かなのだ。

サヴリナはアルメリアにとって教師と言うよりも父親のような存在で、それも厳格な父親であつたため、幼い頃はそれなりに好いていたが、学年が上がれば上がっただけ煩わしい障害になってきていた。

黒髪は肩のあたりまで真っ直ぐに伸ばされている。

年齢は容姿を見る限りでは判断付かないが、おそらく、アフアンと同じくらいだろう。

水の民の多くがそうであるように、涼やかな顔立ちをしている。そして、表情は常に静かだ。

おおよそ水の民は、感情を隠すことを得意とする。

サヴリナはまさにその典型。

いつだってアルメリアはサヴリナの思いを推し測ろうとして断念する。

この時も冷ややかな暗闇の瞳の奥を覗き見ようとして、アルメリアは心の底でため息をついた。

アルメリアが彼の部屋に入ってきてから長い間を作った末に、彼は抑揚のない声で言った。

「トムナフリー学長から許可が出た。お前の、——いや、お前たちの願いは叶えられたというわけだ」

「ありがとうございます」

「だが、アルメリア。心しておくがいい。この学園を卒業すれば、彼は王位に着く。王宮に上がった後もこの学園で彼に接してきたように接すれば、お前が辛い思いをする」

「分かっています」

「永遠に続く時間などない」

「はい」

「お前は情が深いから……」

「心配して下さっているのですか？」

サヴリナの瞳が大きく開かれる。

そうして、ふっと細められた。

「お前は賢い学生だが、出来の悪い子どもだからな」

「今まで何度もあれをするな、あれはやってはいけない、と言われ続けてきました」

「それはさぞかし不満だったことだろう？」

「ええ。それに窮屈でした」

そうか、と呟くように静かに響く。

アルメリアはくすくす笑った。

「――でも、私は幸せでした」

サウィン祭の準備が本格的に始まっている。

直に自分は学園を卒業する。

卒業した者は、めったなことが起こらない限り、学園に戻ることはない。

親または兄弟のような存在であった学園の教師たちとも二度と会うことはないのだ。

そう思うと、別れの近いこの時期の一瞬一瞬はとても大切なもののように思えてくる。

「先生は私にとって大きくて高い壁でした。遠くにいる時は何にも感じなかったんですけど、歩み寄って行くうちにその大きさに気付かされて。――結局、壁を越えられそうにないことが、この学園における唯一の心残りです」

はははっ、と珍しくサヴリナは声を立てて笑った。

「何を言っている。お前はわたしを越えたではないか。お前の望み、そして、意思を貫いた。最後の最後でわたしに逆らい、そうして、逆らい抜いたではないか」

「怒っているのではないのですか？」

「喜んでいるのだよ」

言って、サヴリナはアルメリアの肩に手を置く。

「行きなさい。直に卒業だが、まだお前のやるべきことはこの学園に残っているはずだ」

とん、と背中を押され、アルメリアはサヴリナの部屋を立ち去った。



サウイン寮のパーティー会場。

ここの舞台は他の寮とは少し造りが異なる。

舞台の背に下がった幕を上げればガラス張りの壁となっているのだ。

ガラスの向こうはサウイン寮の中庭である。

雪に覆われた中庭は、かろうじて中央の噴水だけが形を表し、後は白の平面と化している。

劇の終盤、ウンディーネの王女が両腕を掲げると、幕が上がり、ガラス張りの壁が観客に露わになる。

パッと中庭がライトアップされ、その光の中をキラキラと何かが舞う。

——水霧だ。

それは外灯の光に受けて、ダイヤモンドダストのように輝く。

歓声が沸いた。

この演出をいかにできるかで、水のプリフェクトの力量を知れた。

アルメリアの演出は見事に決まり、ウンディーネの王女がノームの王子を海に引きずり込むシーンは多くの観客の心を切なく締め付けた。



祭事用の正装に着替えたアルメリアが再び会場に戻ってくると、すでに会場はダンスタイムとなっていた。

マグエヴァがウークベアと踊っているのを見つけると、アルメリアはそっと壁際に寄った。

「今夜の主役が壁の花じゃあ、しらけるだろうが」

不意に声がして振り返ると、プリフェクトの責務として着飾ったルーグがそこに立っていた。

その隣には同様に着飾ったブロア。

アルメリアのガウンは女性用でドレスに近い作りをしているが、ブロアが身に着けているガウンは男性用であり、マントのような作りをしている。

ふわりと青いガウンが空を優雅に舞った。
アルメリアが気付くと、ブロアがアルメリアに向かって膝を折っ

ていた。

「一曲、お願いできますか？」

紳士のような動作で差し出された手。
アルメリアは息を呑んだ。

ブロアの手を凝視したまま身体を固めていると、ブロアは顔を上げて、ニカッと笑った。

立ち上がり、強引にアルメリアの手を取ると、中央に向かって駆けた。

「待って、ブロア！」

「やっぱり主役はど真ん中で踊らないとな」

「あなた酔っているの？」

「まさか」

曲が変わり、丁度良いと言ってブロアはステップを踏み出した。
慌ててアルメリアもそれに合わせる。

「さっきハルとも踊ったんだ」

「ハルと？」

「そう。男女逆転でね」

「ハルは怒らなかったの？」

「内心では相当……。でも、もう諦めているんじゃないかなあ」

「今回もまたドレスなの？」

「よく似合っていて、可愛いよ」

ほら、とブロアはステップの流れを乱さず器用に指差した。
青いドレスを着たハルがそこにいる。

「本当によく似合っているわね。……可哀想」

結局一年間ドレスを貰ったことになる。

曲が終わり、互いに礼を取ると、ブロアはその低くした姿勢のまま再びアルメリアの手を取った。

そつとその手の甲に唇を当てられた。

「また、あなたのことが好きになってしまうわ」

「嫌いになるつもり？」

「嫌いになれるわけがないわね」

微笑んで、ブロアはアルメリアの手を引き、ルーグの元へと足を

向けた。

いつの間にか、ルーグの傍らにロクマリアが立っている。

彼らに歩み寄りながら、アルメリアはロクマリアに向かって小首を傾げた。

「そろそろパーティーを抜け出す相談でもしているのかしら？」

「大当たり、と拍手喝采してやりたいところだが、そういう気分ではないんだ。悪いな」

「嫌な予感でも？」

「ああ。できるだけ人気のない場所に移動したいな」

「――でも、学園は大勢の王宮騎士に守られているのよ？ それに今は水の季節だわ。火の民である彼には身動きの取りにくい時期だと思うのだけど？」

「明日は卒業式だ。卒業したらすぐにでもロクマリアは王宮に入る。そうになってしまえば、あいつにとっては最後。ロクマリアに手出しできなくなる」

「焦っているはずだ」

「もし俺があいつなら、こうするな」

ルーグが腕組みを外して、人差し指を立てた。

「祭りの騒ぎに引き寄せられたと見せかけてオークを放ち、王宮騎士を呼び寄せる。一時的に手薄になった場所から学園内に侵入。そうして、お前を自らの手で消す」

言葉の最後で、ルーグは人差し指をロクマリアの胸に押し当てた。ロクマリアは頷いた。

「俺もそう思う」

「なら、人気がなくて、尚かつ空から目立つ場所だな」

「空から？」

「前に現れた時、あいつは翼を生やしたオークの背に乗っていた。今回も同じように空から現れるはずだ」

空を自由にできるのは風の民だけだ。

ところが、風の民の多くは王宮遣いを望まず、故に、王宮騎士団において風の民は少数なのである。

王宮騎士の大半は空を飛べない。

——となれば、当然、空から来る。

「あそこがいいだろう」

「ああ、あそこか」

ロクマリアの言葉にルーグが頷く。

ブローもわずかに考えた後に賛同した。

「いつだったか、そこで花火を上げたな」

「アルメリアが俺に大雨を降らせた」

「あなたが悪いのよ、ルーグ」

「いや、そこまでは記憶にないな」

視線を逸らし、とぼける。

ちゃんと覚えている証拠だ。

アルメリアは肩を竦めた。

そうしてから、ロクマリアに振り返る。

彼は苦笑して、行こう、と短く言い放った。



ハラハラと舞っていた雪を、アルメリアは片手を空に掲げて、止めた。

ルーグ曰く、寒さでサラマンダーが縮こまっているらしい。

彼のガウンの下にウジャウジャいるらしいのだが、火の民ではないアルメリアにはその姿を見ることは出来ない。

ブロアのシルフたちも、ロクマリアのノームも、寒さを得意とはしていない。

雪を止めさせろというルーグの要求を退ける気にはなれなかった。

学園の校舎から南に離れたところに小高い丘がある。

ベルティネ祭ではこの丘から花火を打ち上げる。

数年前の夏、幼いルーグがそうしたように。

「よし、ここなら空から丸見えだ」

「いつでも来いって感じだな」

まるで祭りのイベントを待ち望んでいるかのような二人に、アルメリアは腰に両手を当て、ロクマリアは眉を寄せた。

その時だ。

遠くで奇声が響いた。

——オークだ。

布を引き裂いたような奇妙な叫び声。
そうして立ち上った火柱。

王宮騎士がオークと戦っているのだと分かる。

王宮騎士の割合を言えば、一番多いのは火の民だ。
水の季節であるこの時期の戦いは、彼らにとって困難を伴うもの
となっていることだろう。

ハッとして四人は同時に空を仰いだ。

黒い大きな影。

ゾッとするような気配。

アルメリアは思わず拳を胸元に押し付けた。

「デューズ！」

寒々として夜空に響くロクマリアの声。

彼の頭上を数度大きく旋回して、翼を生やしたオークが地面に降
り立った。

その背には、錆色の髪とシグナルレッドの瞳を持った少年。

ロクマリアの従兄。

デューズだ。

「――お前だけは許さない」

曇ったような暗い声だ。

月明かりのせいか、顔色がひどく悪い。

恐ろしくさえ見える。

「デュース、もう終わりにしよう。こんなこと……」

「ああ。終わりにするとも。ロクマリア、お前を殺してな」

ずっと剣を鞘から抜くデュース。

ロクマリアの横で、ルーグも剣の柄に手を掛けた。

「お前など認めるか！ お前に玉座をくれてやるものかーっ！」

デュースが地面を蹴ってロクマリアに突進してくる。

ルーグはロクマリアの軀を押しやり、デュースと剣を交える。

キーン、と鋭い音が響いた。

ちっ、と舌打ちが鳴る。

オークが翼を羽ばたかせた。

風が刃となってルーグを襲った。

すかさずブロアは片手を左から右へと空で薙ぎ払った。

風がぶつかり合い、相殺する。

「凍れ！」

アルメリアの声が低く響いた。

オークの悲鳴が上がる。

みるみるうちにその軀は凍り付いていく。

パン。

銃声。

そして、氷が砕け散る音が辺り一帯にキラキラと響いた。

「くそっ！」

デュースはルীগを剣で押しやると、四人から距離を取った。

「許さない。許さない。お前だけは絶対に。殺してやる！」

「デュース！」

「お前さえいなければ俺が王だ。——いや、お前より俺の方がずっと優れている。ディアントスがお前を選んだなど、何かの間違いだ。俺が王なんだ！」

様子が可笑しい。

デュースはガクリと顔を俯かせると、ガタガタと軀を震えさせた。

錆色の髪が逆立つ。

丸めた背中が異様に盛り上がり、あり得ない形に変形していく。

「いったい何が……」

ガツン、とルীগの剣が音を立てて地面に突き刺さる。

四人とも愕然としてデュースの軀の変化を見守っていた。

——いや、違う。

あまりのことに、身動きが取れなくなっていたのだ。

「オークに変化している！」

誰よりも早く我に返ったのは、アルメリアだった。

耳まで裂けたデュースの口の毒々しい赤を見て、アルメリアは震えた。

背中に現れた大きな瘤。

倍以上に膨れ上がった軀から伸びた六本の腕は、異様に長く浅黒い。

オークは上体を前に倒し、六本の腕と二本足で蜘蛛のような姿勢を取った。

見開かれたシグナルレッドの瞳。

光に反射しているのではなく、自ら輝いて、不気味な光を放っている。

ぐぐぐぐ……と、低い唸り声が地響きのように響く。

「炎よ！」

ルーグが右手を振り降ろした。

だが、炎はオークに火傷一つ負わせられない。

「切り裂け！」

ブローアの風が刃となってオークを襲う。

だが、これもオークの躰に届く前に、何かに弾かれて、消えた。

――何か。

その正体はすぐに露わになった。

暗く深い闇だ。

オークの躰を包むようにそれはうねりを上げている。

そして、次の瞬間。

触角のように、太く長い縄となり、ロクマリアに向かってきた。

ルーグが剣を手にそれを薙ぎ払う。

ブローアも風で、アルメリアも氷で刃を作り、それを裂こうとした。

だが、それは実体のない闇。

どうすることもできなかった。

「ロクマリア！」

ついにデュースの闇はロクマリアを捉えた。

両腕の自由を奪い、両足の動きを止め、ロクマリアの首をじわりじわりと締め上げていく。

「死ね！」

腹の底に響くような声。

それは、憎悪の塊。

「くっ」

苦しげな響きがロクマリアの口から漏れる。

すると、不意に眩しい光がロクマリアの軀を包み込んだ。

彼の右手に刻まれたディアントスが輝いている。

すつと逃げるように闇の触角がロクマリアから離れた。

ロクマリアは首元を手で押さえ、驚いたように辺りを見回した。

「ウィスプ（光の精霊）だ」

えっ、とアルメリアたちも辺りを見回す。

だが、眩しいばかりでそれらしい姿は見えない。

ロクマリアだけが見えているようだ。

彼を愛するウィスプたちの姿が。

「光よ、哀れな存在を導き給え」

ウィスプたちに教えられるまま、ロクマリアはディアントスをオークに向けて掲げた。

すると、オークの背後にオークの闇より更に深い闇が生まれる。
アルメリアはゾツとして両腕で己を抱き締めた。

「何、あれ……?」

「シェイド（闇の精霊）だ」

「シェイド？ あ、闇が？」

どうやらこちらもロクマリアだけにはその姿を見せているらしい。暗黒はずっとオークに近寄り、あっという間にその軀を呑み込んでしまった。

跡形もない。

オークが最期に上げた悲鳴のみ、アルメリアの耳に残された。

「――終わったな」

呟いて、ルーグは遠くから駆け付けてくる王宮騎士たちの姿を見つける。

ロクマリアの肩を軽く叩くと、ルーグは先に立ち、丘を降り始めた。

ブローもアルメリアも後に続く。

「オークになるくらいに欲しいものだとは、俺には思えない」

背中から追ってきた呟きに三人は振り返る。

「その通りさ。王位なんて、そんなもんさ。――けど、だからと言ってくれてやれるものでもない。デューズはお前を殺そうとした。だから俺たちは戦った。そうして、デューズはシェイドに喰われた。そういうことだ」

「ロクマリア、帰ろう。明日は卒業式だ」

「卒業式が終わったら、今度はあなたが私たちを王宮に連れて行ってくれる番ね」

「俺、王宮で何ができるんだろう？」

「私は騎士団にでも入ろうかなあ。あちこち行けそうな気がするし」

「やっぱり私は女官かしら？ でも、最初は下働きよね？ 床磨きとか皿洗いをするのかしら？」

前を歩き出した三人に、ロクマリアは苦笑する。

「何を言っているんだ。三人とも俺の側にいるに決まっているだろう？ ——とりあえず一緒に勉強だな」

「勉強？」

怪訝そうに振り返る三人。

ロクマリアは続けた。

「一から政を叩き込まれる俺に、お前たちは付き合うんだ」

「げっ」

顔を引きつらせるルーグ。

ブローも眉間に皺を寄せている。

アルメリアだけは不敵に微笑んだ。

「あら、それ面白そうじゃない」

「どこがだよ？」

「四人で一緒にいられるところがよ」

ぐっとアルメリアが片手を空に掲げると、再びヒラリヒラリと雪が舞い始めた。

寒空を仰いで、ぽかんとルークが言う。

「――確かにそれもいいかもしれないな」



この時ばかりはプリフェクト以外の者もガウンを着る。

ただし、彼らはアカデミックガウンを着、プリフェクトのような派手さはない。

宝石をふんだんに縫いつけたガウンを身に纏ったプリフェクトたちは壇上にあり、それぞれ下級生の送辞に対する答辞を読み上げる。

そして、トムナフリーから手渡された卒業証書を片手に四人が壇上を降りると、厳かな式は終わった。



分厚くて重たいガウンを脱ぎ捨てると、ずっと心が軽くなった気がする。

学園の正門の前で、アルメリアは学友たちを見送った。

マグエヴァの身体を抱き締めて、どうか、と彼女の幸せを願う。慕ってくれた下級生たちの手を一人一人握って、微笑む。

最後に振り返った時、サヴリナと視線が合った。

アルメリアは彼に向かって、ゆっくりと深く頭を下げた。

惜しまれながら正門を出ると、大きくて立派な馬車が止まっている。

その扉には黄金色のディアンツスが描かれている。

馬車に繋がれた六頭の白い馬には大きな翼が生えており、額には一本の長い角が生えている。

初めて見るその生き物はユニコーン（一角獣）と呼ばれる生き物で、王家の者のみに仕える生き物だという。

馬車の前に立つ男がロクマリアに向かって優雅な礼を取った。彼はロクマリアを迎えに来たのだ。

「この馬車に乗ったら、王宮に行けちゃうのね」

「行けちゃうな」

「なんだよ？ 怖いのかよ、二人とも？」

「ブローアは怖くないの？」

聞き返されてブローアは、うーん、と低く唸った。

「怖いとは思わないな」

「俺は少し怖いかな。どうなるんだ、俺！……って感じでさ」

「私もよ。――でも」

「ああ、でもさ」

迎えの男と会話をしているロクマリアをちらりと見やって、ルーグは言葉を続けた。

「俺がいて、ブロアがいて、アルメリアがいて、おまけにロクマリアまでいれば、何だってどうにかなるさ」

遠く。

はるか遠くに薄ぼんやりと影を見せる王宮。

クリスタルパレス（水晶宮）という別名を持つその城は、今の自分たちにとって未知の世界だ。

背後には慣れ親しんだ学園がある。

――だが、後戻りはできない。

前へ。

前へ進むしかない。

会話を終えたロクマリアがゆっくりと振り返った。

アルメリアは微笑んで、ブロアとルーグと共に、彼の元へと歩み出した。

【第四の季節 おわり】

第四の季節…水

(後編)

(後書き)

ボイスドラマは、[←こちら](#)。

<http://kaido.nomaki.jp/index3.html>

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1802/>

Tir na nOg 妖精たちの4つの季節の物語

2010年10月9日13時52分発行